

東京大学大学院人文社会系研究科
附属文化交流研究施設
基礎理論部門

外部点検評価資料

2003年1月

東京大学大学院人文社会系研究科
附属文化交流研究施設
基礎理論部門

外部点検評価資料

2003年1月

目 次

I 沿革	1
1. 研究室開設の背景	1
2. 研究室開設とその後の歩み	2
II 組織上の位置	3
1. 特色	3
2. 運営委員会	3
III 教官構成	5
1. 教官定員	5
2. 歴代教官	5
3. 現任教官	8
IV 学術交流	10
1. 国際シンポジウムの開催	10
2. 研究集会・講演会の開催	10
3. 国際会議・国際シンポジウムの司会など	12
4. 文化交流研究懇談会	13
V 研究プロジェクト	23
1. 研究助成・共同研究等一覧	23
2. 大規模プロジェクトの概要	25
VI 研究成果	38
1. 研究室紀要	38
2. 歴代教官の主な研究成果	40
3. 現任教官の研究成果	51
VII 学生教育	63
1. 大学院・学部における授業（過去5年間）	63
2. 論文審査	65
VIII 施設・設備	66
1. 研究室	66
2. 所蔵資料	67
IX 文化交流研究施設・基礎理論部門の役割と評価	69
1. 学会などにおける役割	69
2. 高等教育・大学運営・社会における役割	71
3. 世界・日本における評価	73
まとめ	75
1. 役割と成果	75
2. 展望	77

I 沿革

1. 研究室開設の背景

文化交流研究施設が文学部に設置されたのは、大学改革の気運がはじまった時期である。明治・大正以来の伝統の上に立つ文学部の学科別編成は、第二次世界大戦後に新制大学が発足した後も、そのままの形で存続していた。それに初めて手直しを加えたのは、1960年代前半である。昭和38年以後、文学部は、教育体制として第1類（哲学）、第2類（史学）、第3類（文学）、第4類（社会学）の四類を置き、各類に専修課程を設ける一方、将来計画委員会を作って、長期にわたる文学部の未来像を作成するようになったが、これと並んで東京大学の全体に関しても、総合計画委員会が設置され、将来東大をどういう姿に改めるかについて検討が進められていた。改革が企図された理由や事情は複雑であったが、日本の大学が研究面でも教育面でも大きな変革期にあることが広く認められ、その中で従来の特長領域が細分化された研究だけでは対処できない新しい分野のあることが注目されて、複数の専門領域にわたる研究や専門領域の協力が必要ないわゆる「学際研究」の必要が強調された。当時の文学部では、こうした変化に対応するために、講座や研究室の枠を超えて新しい研究を展開させるための共通の場としての「文化交流研究施設」の創設、文学部の改組拡充、地域研究の組織化という三つの企画が推進された。

そのような状況のなかで文化交流研究施設の創設は、中村元教授が学部長の時代に推進され、1965（昭和40）年度にその予算案が通過して、翌1966（昭和41）年度から施設が発足することになった。この施設の研究目的は、諸地域間の文化の交流や異なった文化領域にわたる関与と展開について総合的な研究を行なうことである。それと同時に、将来は、「旧来の講座制、学科制の壁を破り、幅広い世界的視野に立つ研究体制」をめざし、講座と施設の部門間に人事の交流も可能となるいくつかの部門の増設も計画された。

文化交流研究施設が発足するまでの経過を振り返ってみると、まず「交流」という名称が決定に至るまでに活発な論議が交わされた。この施設は文化の「交流・比較」を取扱うという構想であったが、文化「が」交流することと、文化「を」比較することとを一つにまとめられない、という考えがあり、研究内容はこれら両面にわたるものとして、名称は交流だけとすることに落ち着いた。当時学部の諸教官が研究に専念出来るようにサバティカル・リープを作る要望が強く、講座と施設の部門との間に人事の交流も期待されていた。当初計画では、つぎの5部門、2資料室をもって構想された。

- I 文化の交流と発展（基礎理論）
- II 日本と外国 (1) 思想文化、(2) 生活文化
- III 東洋と西洋 (1) 思想文化、(2) 生活文化
- A 日本文化総合カード資料室
- B 文化交流資料室

2. 研究室開設とその後の歩み

1966（昭和 41）年に実際に発足したのは「文化の交流と発展（基礎理論）」の一部門だけであったが、施設の発足に際して行った教官採用人事方式は、まったく新しいものであった。まず、文学部教授会で選挙により選ばれた 10 人の委員からなる選考委員会（教授・助教授同数）が設けられた。この委員会が、教授会メンバーの推薦した多数の候補者を整理し、必要に応じて更に専門家を加え、審議を進めた。こうして優れた専任教官が採用された。施設発足後の施設運営にも新しい方式が導入された。着任した専任教官を中心に、中村元教授を委員長とする運営委員会が設置され、多角的な視点と協力のもとに研究施設の運営を行うこととなった。下村富士男教授などが、日本と西洋との文化交流の観点から、明治時代の翻訳書の目録を作成されたのを最初の成果発表として、その後各種の文化交流の研究が進められると共に、研究の交流が行われた。

先にも触れたように、文化交流研究施設は、当初、5 部門 2 資料室のうち、第 1 部門にあたる「文化の交流と発展」の 1 講座をもって発足し、漸次予定部門の充実をみる予定であった。しかし、諸般の事情により当初の計画は大幅に遅れ、1974（昭和 49）年度からは 4 部門、1 資料室に計画を再編成してその実現に努めた。その後ほぼ継続的に行われていた概算要求は認められず、結局、この計画も実現するには至らなかった。

その後、1990 年代に入って、文化交流研究施設は、新たな展開を迎えることになる。当初の計画を実現することが困難であると判断され、人文学の分野において緊急度の高い重要な研究を行う場を施設内に設けるという方針が立てられたのである。こうして、1993（平成 5）年度に朝鮮文化部門、1994（平成 6）年度に東洋諸民族言語文化部門が増設され、それにともない文化交流研究施設は従来からの「基礎理論部門」と新たな「朝鮮文化部門」、「東洋諸民族言語文化部門」の 3 部門からなる研究組織となった。

その後 2002（平成 14）年度からは「朝鮮文化部門」が「韓国朝鮮文化専攻」として改組されて文化交流研究施設から離れ、2002（平成 14）年 7 月から寄附研究部門として「文化環境復元部門」が新たに設立されたことから、現在は、「基礎理論部門」、「東洋諸民族言語文化部門」、「文化環境復元部門」の 3 部門によって構成されている。

Ⅱ 組織上の位置

1. 特色

研究室の正式名称は、大学院人文社会系研究科附属文化交流研究施設基礎理論部門である。文化交流研究施設は、東京大学内に数多く設置された研究施設のひとつである。研究施設は、本研究部門の他に、東洋諸民族言語文化部門、文化環境復元部門があって、合計3部門で構成されている。3部門の各研究室は、相互に設立の経緯と部門としての性格を異にしており、人事・予算・教育カリキュラムをはじめとして、相互に独立した運営が行われ、同一研究施設に所属しながら、それぞれ独立した研究部門として、相互不干渉の原則が守られている。

研究施設は、大学組織の上で研究科と研究所の中間的存在と位置づけられている。すなわち、東洋文化研究所・社会情報研究所など、学内の独立した附属研究所と異なり、研究施設は大学院研究科・学部にも所属しつつ、研究を主体とした活動を行うものと規定されている。したがって本研究部門には学部学生定員がついていない。

本研究部門は、複数の専門領域にわたる研究、複数の地域文化を対象とする研究、あるいは、諸地域間の文化交流の研究など、幅広い世界的視野に立つ研究を行なうことを目的として設立されたため、専攻を異にする様々な分野の教授たちが着任し、それぞれ、各々の専門とする学問領域に基礎を置きながら、多分野に跨る、あるいは複数文化に関わる研究を行なってきたことが大きな特色である。

2. 運営委員会

本研究部門は、大学院人文社会系研究科の附属機関であるため、所属教官は、研究科の教授会構成員となっている。また、予算も、他の研究室と同様に研究科・文学部の予算の中から所定の方式によって配分を受けている。ただし、附属研究施設という性格上、人事をはじめとする研究室運営に関しては、研究科長(学部長)が指名する文化交流研究施設運営委員会が研究室運営全般にわたって協議を行っている。

運営委員会は、2003年1月現在、以下の6名の委員で構成されている。

佐藤慎一教授(大学院人文社会系研究科長・文学部長・文化交流研究施設長)

高橋和久教授(大学院人文社会系研究科評議員)

立花政夫教授(大学院人文社会系研究科評議員)

高山博助教授(大学院人文社会系研究科・文化交流研究施設基礎部門主任)

松村一登教授(大学院人文社会系研究科・文化交流研究施設東洋諸民族言語部門主任)

林徹教授(大学院人文社会系研究科)

人事については、独立した発議を行うことの出来る他研究室と異なった方式をとっている。その手続きは以下の通りである。

- (1) 研究室の人事要請に基づいて運営委員会で協議が行われる。
- (2) 研究科長・学部長が教授会で人事の発議を行う。
- (3) 人事は部内公募、公募期間は約 1 か月とする。
- (4) 教授会において 6 名の選考委員を互選する。
- (5) 選考委員が 3 回以上の審査と協議を行う。
- (6) 1 名の採用候補者を選抜し、教授会に報告する。
- (7) 投票により採否を決定する。

運営委員会が協議を行うこと、部内公募とすることが他の研究室の人事と異なるところである。したがって、本研究室の人事は運営委員会の下に行われることになる。

Ⅲ 教官構成

1. 教官定員

設立当初から教授1、助教授1、助手1の合計3名を定員としている。平成15(2003)年1月1日現在の現員は、教授1、助教授1、助手1である。

2. 歴代教官

本研究部門は、幅広い視野に立つ研究の推進をその存立の前提としているため、専攻を異にする様々な分野の教授たちが着任してきた。初代の吉田精一教授は日本文学、次の秋山光和教授は美術史学、その次の山口瑞鳳教授はチベット語及びチベット史であり、それぞれ、各々の専門とする学問領域に基礎を置きながら、多分野に跨がる、あるいは複数文化に関わる研究を行なってきた。

2.1 教授・吉田精一（よしだ・せいいち）

1908年11月12日生

- 1932年 3月 東京帝国大学文学部国文科卒業
- 4月 日本女子高等学園国文科講師（1933年3月まで）
- 1934年 4月 私立拓殖大学講師及び二松学舎専門学校教授（嘱託）
- 1941年 4月 拓殖大学教授、二松学舎兼任
- 1942年 4月 津田英学塾講師
- 1944年 4月 日本大学文学部講師
- 9月 東京高等師範学校講師
- 1948年 1月 日本近代文学会理事就任（1982年6月まで。その間、1967・1968年度および1976～79年度代表理事）
- 1948年 日本比較文学会創立、理事に就任（1974年6月まで）
- 1949年 4月 東京大学文学部講師（1958年まで）
- 1950年 中央大学文学部教授。拓殖大学（当時紅陵大学）辞任
- 1953年 6月 中央大学教授を辞任
- 7月 東京教育大学文学部教授
- 毎日出版文化賞。昭和三十年度芸術選奨（文部大臣賞）受賞
- 1956年 2月 文部省国語審議会委員（1958年11月まで）
- 4月 日本ユネスコ国内委員会調査委員（文部省）
- 4月 全国大学国語国文学会理事となる
- 1959年 5月 日本芸術院賞受賞
- 1960年 3月 東京大学より文学博士の学位を受ける
- 4月 東京教育大学評議員（1962年3月まで）
- 1964年 1月 アメリカ合衆国州立ミシガン大学客員教授

- 1964年 日本近代文学館創立、常務理事就任
- 1965年 7月 文部省大学設置審議会専門委員（1971年まで）
- 1966年 5月 歴史的風土審議会委員（総理府）
- 1967年 3月 東京大学文学部教授（文化交流研究施設主任）、東京教育大学教授兼任
- 1968年 2月 学術審議会（専門）委員（文部省）、教育大学兼任を解く
- 1969年 3月 東京大学退官
- 4月 埼玉大学教養学部教授就任
- 4月 昭和女子大学講師兼任
- 9月 アメリカ合衆国ハワイ大学客員教授
- 1971年 4月 埼玉大学教養学部長
- 1972年 4月 放送大学設置準備委員（文部省）
- 1974年 3月 埼玉大学退官
- 4月 大妻女子大学文学部教授
- 1975年 4月 大妻女子大学図書館長
- 1976年 4月 大妻女子大学文学部長（1980年3月まで）
- 1979年 11月 勲二等瑞宝章
- 1980年 4月 大妻女子大学図書館長再任（1984年3月まで）
- 1983年 12月 日本学士院会員
- 1984年 3月 大妻女子大学退職
- 4月 大妻女子大学名誉教授号授与
- 1984年6月9日逝去

2.2 教授・秋山光和（あきやま・てるかず）

- 1918年5月17日生
- 1941年 3月 東京帝国大学文学部美術史学科を卒業
- 4月 文部省美術研究所（現独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所美術部）嘱託
（後に研究員（文部技官）・第一研究室長）
- 1950年 フランス政府招聘留学生（1952年まで）
- 1953年 美術史学会常任委員
- 1958年 仏・英・蘭・伊4ヶ国を巡回した日本古美術展に政府派遣員（1959年まで）
- 1959年 フランス政府より芸術文化勲章（シュヴァリエ）受賞
- 1960年 同オフィシエ章受賞
- 1965年 外務省派遣日本文化講師
- 1967年 東京大学文学部助教授（文化交流研究施設）
- 1967年 5月 日本学士院賞
- 1968年 アメリカ、イエール大学客員教授
- 1969年 3月 東京大学文学部教授（文化交流研究施設）

1969年		ユネスコ国際会議(人文科学の主要動向に関する国際的調査特別委員会 および仏教美術国際共同委員会)
1969年	3月	東京大学より文学博士の学位を受ける
1972年		アメリカ、イエール大学客員教授
1973年		フランス、コレージュ・ド・フランス特別講師
1977年		紺綬褒章
1979年		東京大学停年退官
1979年		学習院大学文学部教授
1984年		フランス学士院人文科学アカデミー外国人参与会員
1988年		東京大学名誉教授
1988年		英国学士院客員会員
1989年		学習院大学退職
1991年		勲三等旭日中綬章
1992年		ベルギー政府レオポルド三世勲章
1998年		フランス政府レジョン・ドヌール勲章
1998年		芸術文化勲章

2.3 教授・山口瑞鳳(やまぐち・ずいほう)

1926年	2月21日	日生
1953年	3月	東京大学文学部印度哲学先文学科卒業
1958年	3月	東京大学大学院(旧制)退学
1964年	9月	フランス、Ecole Pratique des Hautes Etudes 第4、第5学部退学
1979年	9月	東京大学より文学博士の学位を受ける
1958年	10月	フランス、Centre Nationale de la Recherche Scientifique, attaché de re- cherches(～1962年9月)
1962年	10月	ロックフェラー財団 給費研究員(在仏)(～1964年9月)
1964年	11月	財団法人東洋文庫 専任研究員(～1970年4月)
1970年	5月	東京大学文学部助教授(文化交流研究施設)
1972年		日本翻訳文化賞
1979年	4月	東京大学文学部教授(文化交流研究施設)
1984年		日本学士院賞
1985年		東方学術賞
1985年		Member d'honneur de La Société Asiatique (France)
1986年	1月	東京大学教授より名古屋大学教授(文学部インド哲学科)に転任
1988年		毎日出版文化賞
1989年	3月	名古屋大学 定年退官
1989年	5月	東京大学名誉教授
1996年		勲三等瑞宝章

3. 現任教官

平成 14(2002) 年度の本研究部門の教官は、美術史と考古学を専攻する青柳正規教授、歴史学を専攻する高山博助教授、考古学を専攻する松山聡助手である。

青柳正規教授は、ギリシア・ローマ美術考古学を基礎に、古代ギリシア・ローマ文化に関する学際的研究、古代地中海域と周辺文化圏の政治、社会、文化の交流に関する研究を行っており、高山博助教授は、歴史学（西洋中世史）を基礎に、中世ヨーロッパの統治システムの比較研究、中世地中海三大文化圏（ラテン・キリスト教文化圏、ギリシア・ビザンツ文化圏、アラブ・イスラム文化圏）の比較研究を進めている。

3.1 教授・青柳正規（あおやぎ・まさのり）

1944 年 11 月 21 日生

1967 年 3 月 東京大学文学部美術史学専修課程卒業

1969 年 3 月 東京大学大学院人文科学研究科修士課程美術史専修課程修了（文学修士）

1969 年 9 月 イタリア政府奨学金留学生としてローマ大学に留学（1971 年 12 月まで）

1972 年 3 月 東京大学大学院人文科学研究科博士課程退学

1972 年 4 月 東京大学文学部助手

1978 年 6 月 地中海学会賞

1979 年 1 月 筑波大学芸術学系講師

1984 年 11 月 Premio Porto Empedocle（ポルト・エンペドクレ賞、イタリア）

1985 年 4 月 東京大学文学部助教授（文化交流研究施設）

1989 年 4 月 東京大学総長補佐（～ 1990 年 3 月）

1991 年 4 月 東京大学文学部教授（文化交流研究施設）

1991 年 6 月 マルコ・ポーロ賞

1991 年 7 月 浜田清陵賞

1992 年 2 月 東京大学より博士（文学）の学位を受ける

1992 年 4 月 東京大学広報委員会委員長（～ 1994 年 3 月）

1993 年 4 月 東京大学総合研究資料館館長（～ 1996 年 3 月）

1993 年 10 月 毎日出版文化賞

1994 年 4 月 東京大学評議員（～ 1996 年 3 月）

1996 年 4 月 東京大学人文社会系研究科研究科長・文学部長（～ 1997 年 3 月）

1997 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科教授（文化交流研究施設・基礎部門）

1997 年 4 月 東京大学副学長（～ 1999 年 3 月）

1997 年 大学設置審議会委員（～ 1999 年）

1998 年～ ユネスコ国内委員会委員

2000 年～ ユネスコ国内委員会文化活動小委員会委員長

2002 年 12 月 Onorificenza di Ufficiale dell'Ordine al Merito della Repubblica Italiana（イタリア共和国功績正騎士勲章）

現在に至る。

この他、東北大学、九州大学、東京芸術大学、名古屋大学、お茶の水女子大学、筑波大学、獨協大学、慶応義塾大学、聖心女子大学で非常勤講師をつとめる。

3.2 助教授・高山 博（たかやま・ひろし）

1956年8月20日生

1980年 3月 東京大学文学部西洋史学科卒業

1980年 4月 東京大学大学院人文科学研究科西洋史学修士課程入学

1982年 3月 東京大学大学院同研究科同修士課程修了（文学修士）

1982年 4月 東京大学大学院同研究科同博士課程進学

1984年 9月 アメリカ、イエール大学大学院歴史学博士課程入学
(Harvard Yenching Institute, Doctoral Scholarship for Junior Faculty, 1984～88による)

1986年 5月 アメリカ、イエール大学大学院 M.A. (Master of Arts) 取得

1987年 9月 アメリカ、イエール大学 teaching assistant (12月まで)

1988年 3月 東京大学大学院人文科学研究科西洋史学博士課程単位取得退学

1988年 11月 イタリアでの古文書調査（トヨタ財団昭和63年度研究助成による）

1989年 6月 イギリス、ケンブリッジ大学客員研究員 (1990年3月まで)

1990年 5月 アメリカ、イエール大学大学院歴史学博士課程修了、Ph.D. 取得
Robert S. Lopez Memorial Prize (イエール大学最優秀中世史博士論文賞)

1990年 4月 一橋大学助教授（経済学部）（1993年4月から1994年3月まで併任助教授）

1993年 4月 東京大学文学部助教授（文化交流研究施設）

1993年 12月 サントリー学芸賞

1994年 6月 地中海学会賞

1994年 10月 マルコ・ポーロ賞

1995年 10月 フランス、国立社会科学高等研究院客員研究員 (1996年9月まで) (国際交流基金フェロシップによる)

1998年 4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教授（文化交流研究施設・基礎部門）

2001年 10月 （西洋史学助教授を併任）

2002年～ 21世紀COEプログラム専門委員（人文科学）

2002年 10月 イタリア、American Academy in Rome, Department of Education Resident in Medieval Studies (12月まで)

現在に至る。

この他、北海道大学、九州大学、岡山大学、中央大学、國學院大學、放送教育開発センターで非常勤講師をつとめる。

IV 学術交流

1. 国際シンポジウムの開催

- 1996年 11月 国際シンポジウム「古代ローマの別荘文化 Roman Villa and Its Culture」を開催し、参加者との研究会を行う。(青柳正規)
- 1999年 4月 国際シンポジウム「ヘレニズム絵画、その特質、意義、課題、そして展望 Hellenistic Painting, Characteristics, Meaning, Problems and Prospects」を開催し、参加者との研究会を行う。(青柳正規)
- 2001年 11月 国際シンポジウム「東西交流と日本」(東京大学・日本国際教育協会共催)を、実行委員として開催する。(高山博)
- 2002年 2月 国際シンポジウム「ポンペイとその記録 Pompei e le sue documentazioni」を開催し、参加者との研究会を行う。(青柳正規)

2. 研究集会・講演会の開催

- 1988年 11月 S. De Caro 博士(ナポリ発掘監督局局長)を招聘し、ポンペイの歴史に関する研究会と講演会を開催。(青柳正規)
- 1988年 11月 J. De Waele 教授(ニーメンヘン大学)を招聘し、ポンペイの歴史に関する研究会と講演会を開催。(青柳正規)
- 1991年 1月 A. Laidlaw 教授(ホリズ大学)を招聘し、「ポンペイ第I様式壁画装飾」の研究会および講演会を開催。(青柳正規)
- 1991年 10月 E. Salza Prina Ricotti 博士(教皇庁考古学アカデミー会員)を招聘し、「ハドリアヌスの別荘」と「イタリアにおける建築遺構の保存問題」について研究会および講演会を開催。(青柳正規)
- 1991年 11月 A. Laidlaw 教授(メリーランド大学)を招聘し、ポンペイ絵画第1様式に関する研究会と講演会を開催。(青柳正規)
- 1992年 10月 E. Arslan 博士(ミラノ市立考古学博物館館長)を招聘し、ギリシア・ローマの古銭学に関する研究会と講演会を開催。(青柳正規)
- 1992年 11月 J. De Waele 教授(ニーメヘン大学)を招聘し、「ギリシア古典建築のオーダー」について研究会および講演会を開催。(青柳正規)
- 1993年 1月 E. Salza Prina Ricotti 博士(教皇庁考古学アカデミー会員)を招聘し、ローマ建築史に関する研究会と講演会を開催。(青柳正規)
- 1993年 4月 U. Pappalardo 博士(ナポリ大学)を招聘し、「ポンペイ壁面装飾」の研究会および講演会を開催。(青柳正規)
- 1993年 11月 N. Di Vita 教授(在アテネ・イタリア考古学院院長)を招聘し、「北アフリカのギリシア・ローマ文化」に関する研究会と講演会を開催。(青柳正規)
- 1994年 2月 G. Gorini 教授(パドヴァ大学)を招聘し、「ギリシア・ローマの古銭学」に関する研究会と講演会を開催。(青柳正規)
- 1994年 4月 M. F. Briguet 博士(ルーブル美術館)を招聘し、エトルリア考古学に関

- する研究会と講演会を開催。(青柳正規)
- 1995年 10月 A. Sartori 教授(ミラノ大学)を招聘し、ギリシア・ローマの碑文学に関する研究会と講演会を開催。(青柳正規)
- 1996年 1月 Fulvia Lo Schiavo 博士(イタリア共和国サルデーニャ考古監督局総監)を招聘し、「サルデーニャ地方における先史文化」に関する研究会と講演会を開催。(青柳正規)
- 1996年 4月 Enrica Foschi 博士(イタリア共和国チヴィタヴェッキア国立博物館主任修復士)を招聘し、「考古遺跡における保存・修復科学」に関する研究会および講演会を開催。(青柳正規)
- 1996年 5月 Julia Valeva 教授(ブルガリア国立社会歴史研究所主任研究員)を招聘し、「古代トラキアの文化」に関する研究会と講演会を開催。(青柳正規)
- 1996年 11月 M. A. Tomei 博士(ローマ考古監督局)、C. Bencivenga Trillmich 教授(ケルン大学)、G. Cerulli-Irelli (元ロンバルディア考古監督局局長)、M. Del Chiaro 教授(カルフォルニア大学)、C. Vismara 博士(ヴェネト考古監督局)、J. Valeva 博士(ブルガリア国立歴史研究所)、K. S. Freyberger (在ダマスカス・ドイツ考古学研究所シリア支部長)、H. Blank 博士(在ローマ・ドイツ考古学研究所図書館長)、C. Vorster 博士(ミュンヘン大学)とともに「イタリアと古代地中海世界のローマ別荘 Le ville romane dell' Italia e del Mediterraneo antico」と題する学術研究集会を開催。(青柳正規)
- 1997年 3月 M. Scualciapino 教授(ローマ大学)を招聘し、ローマ属州考古学に関する研究会と講演会を開催。(青柳正規)
- 1997年 5月 Marjatta Nielsen 教授(デンマーク Odense 大学)を招聘し、「イタリア中部のエトルリア美術」について研究会および講演会を開催。(青柳正規)
- 1997年 6月 P. Brandizzi 博士(ローマ考古監督局)を招聘し、古代ローマ地誌学に関する研究会と講演会を開催。(青柳正規)
- 1997年 6～7月 G. Gorini 教授(パドヴァ大学)を招聘し、「ギリシア・ローマの古銭学」に関する研究会と講演会を開催。(青柳正規)
- 1997年 11月 M. Sapelli 博士(ロンバルディア考古監督局)を招聘し、北イタリアの考古学に関する研究会と講演会を開催。(青柳正規)
- 1998年 1月 Nancy de Grummond 教授(アメリカ合衆国フロリダ州立大学古典学部)を招聘し、「イタリア中部のエトルリア時代からローマ時代にかけての考古遺跡」について研究会および講演会を開催。(青柳正規)
- 1998年 11月 M. Marini Calvani 博士(ラツィオ考古監督局)を招聘し、ルーニを中心とする発掘調査に関する研究会と講演会を開催。(青柳正規)
- 1999年 11月 Marina Sapelli 博士(イタリア ローマ国立博物館 館長)を招聘し、「ローマ時代神殿」について研究会および講演会を開催。(青柳正規)
- 2000年 1月 F. Civita 博士(スティッベルト美術館)を招聘し、「美術品コレクションの形成」について研究会を開催。(青柳正規)
- 2000年 5月 U. Pappalardo 教授(ナポリ大学)、D. Esposito 博士(ナポリ大学)を招聘し、

- 「ポンペイ壁画第四様式」について研究会および講演会を開催。(青柳正規)
- 2000年 11月 J. Valeva 博士 (ブルガリア国立歴史研究所)、P. Morreno 教授 (ローマ大学)、I. Baldassare 教授 (ナポリ大学)、A. Pontrandolfo 教授 (サレルノ大学)、M. Cipriani (サレルノ考古監督局) ほか 2 名の外国人研究者とともに「ヘレニズム絵画 Hellenistic Painting」と題する学術研究集会を開催。(青柳正規)
- 2000年 11月 David Abulafia 教授 (ケンブリッジ大学) を招聘し、中世地中海のユダヤ教徒とイスラム教徒に関する講演会を開催する。(高山博)
- 2001年 10月 Massimo Montanari 教授 (ボローニャ大学) を招聘し、カロリング朝期の社会・経済の変容に関する講演会を開催する。(高山博)
- 2001年 11月 U. Pappalardo 教授 (ナポリ大学)、A. De Simon 教授 (ナポリ大学) を招聘し、「ヴェスヴィオ山周辺の考古学」について研究会および講演会を開催。(青柳正規)
- 2001年 12月 C. Angelelli 博士 (教皇庁考古学研究所) を招聘し、「オプス・セクティレ」について研究会および講演会を開催。(青柳正規)
- 2002年 2月 A. Ciarallo 博士 (ポンペイ考古監督局研究部長)、F. Pescatore 教授 (サレルノ大学)、U. Pappalardo 教授 (ナポリ大学)、A. De Simone (ナポリ大学)、G. Cerulli-Irelli 博士 (元ロンバルディア考古局局長) ほか 5 名の外国人研究者とともに「ポンペイとその記録 Pompei e le sue documentazioni」と題する学術研究集会を開催。(青柳正規)
- 2002年 3月 A. Zanker 教授 (在ローマ・ドイツ考古学研究所所長、ミュンヘン大学) を招聘し、「帝政期ローマの地誌学」について研究会および講演会を開催。(青柳正規)
- 2002年 3月 C. Angelelli 博士 (教皇庁考古学研究所) を招聘し、「古代ローマの大理石」について研究会および講演会を開催。(青柳正規)
- 2002年 11月 U. Pappalardo 教授 (ナポリ大学)、M. Grimaldi 博士 (ナポリ大学)、D. Esposito 博士 (ナポリ大学)、Rosaria Ciardiello 博士 (ナポリ大学) を招聘し、「ポンペイ壁画」について研究会を開催。(青柳正規)

3. 国際会議・国際シンポジウムの司会など

- 1996年 11月 国際シンポジウム「古代ローマの別荘文化 Roman Villa and Its Culture」司会・コメント、東京大学 (青柳正規)
- 1999年 4月 国際シンポジウム「ヘレニズム絵画、その特質、意義、課題、そして展望 Hellenistic Painting, Characteristics, Meaning, Problems and Prospects」司会・コメント、東京大学 (青柳正規)
- 2001年 4月 国際シンポジウム『研究者の交流に関する日本－EU ワークショップ』(日本学術振興会) 第 3 セクション司会・コメント (青柳正規)
- 2001年 11月 国際シンポジウム『東西交流と日本』(東京大学・日本国際教育協会共催)、歴史分科会司会・コメント、東京、国際研究交流大学村・東京国際交流館 (高

- 山博)
- 2001年 12月 “Congresso Internazionale di Studi: Ruggero I, Gran Conte di Sicilia, 1101-2001,” Chair, Troina (Enna), Italia (高山博)
- 2002年 2月 国際シンポジウム「ポンペイとその記録 Pompei e le sue documentazione」司会・コメント、東京大学(青柳正規)
- 2002年 6月 “Arte e Forma nella Sicilia Normanna,” Chair, Bibliotheca Hertziana (Max-Planck-Institut fur Kunstgeschichte), The British School at Rome, Roma, Italia (高山博)
- 2002年 10月 国際シンポジウム『EUと日本』(外務省主催)文化セクション司会・コメント(青柳正規)

4. 文化交流研究懇談会

本研究部門は、人文社会系研究科・文学部教授会構成メンバーの研究に関する情報の普及と研究の促進のために、その設立当初から定期的に「文化交流研究懇談会」を開催しており、平成13年2月で第168回を迎えた。

文化交流研究懇談会発表題目・発表者

- 1) 昭和42年5月31日
「スライドによる中国の現状」藤堂明保教授
- 2) 昭和42年6月14日
「ペリオの中央アジア踏査と蒐集美術品」秋山光和助教授
- 3) 昭和42年10月11日
「ベニスにおける国際美術史学会についての報告」吉川逸治教授
- 4) 昭和42年10月25日
「アメリカ学生の反戦運動」高橋徹助教授
- 5) 昭和42年11月8日
「仮面とユマニスムー文化交流についての私見」今道友信助教授
- 6) 昭和42年11月22日
「ヴァイキングとアイスランド」堀米庸三教授
- 7) 昭和42年12月6日
「電子計算機の非数値利用」雨宮綾夫教授(工学部物理工学)
- 8) 昭和43年1月17日
「藤原宮趾の発掘について」井上光貞教授
- 9) 昭和44年4月24日
「デリー近傍のインド・イスラム建築」山本達郎教授
- 10) 昭和44年5月15日
「欧米における日本美術の蒐集と研究」秋山光和教授
- 11) 昭和45年4月8日
「ネパールの文化管見」山本達郎教授

- 12) 昭和 46 年 1 月 20 日
「ダライラマ政権の成立」山口端鳳助教授
- 13) 昭和 46 年 3 月 5 日
「論語を読んで」宇野精一教授
- 14) 昭和 46 年 9 月 29 日
「バイロンとロマン派の美術」高階秀爾助教授
- 15) 昭和 46 年 11 月 10 日
「古代ギリシャの口承叙事詩とヘシオドス」久保正彰助教授
- 16) 昭和 46 年 12 月 1 日
「祭調査から見た二三の問題」柳川啓一助教授
- 17) 昭和 47 年 1 月 12 日
「イギリスの詩における garden(庭) のイメージについて」平井正穂教授
- 18) 昭和 47 年 5 月 24 日
「平安時代の古訓点資料について」築島裕助教授
- 19) 昭和 47 年 6 月 21 日
「帝王―大地の夫―古代インド帝王観の一側面」原實助教授
- 20) 昭和 47 年 10 月 18 日
「高松塚古墳とその壁画をめぐる諸問題」井上光貞教授、秋山光和教授
- 21) 昭和 47 年 11 月 22 日
「新羅百済の遺跡を巡って」西嶋定生教授
- 22) 昭和 48 年 1 月 24 日
「祈りの形」堀米庸三教授
- 23) 昭和 48 年 2 月 24 日
「傭外人教師 Ludwig Riess のこと」林健太郎教授
- 24) 昭和 48 年 3 月 14 日
「日本の殉死墓」古川哲史教授
- 25) 昭和 48 年 3 月 22 日
「自己にたよれ、法にたよれ」中村元教授
- 26) 昭和 48 年 5 月 9 日
「悪者小説(ロマン・ピカレスク)の系譜」西本晃二助教授
- 27) 昭和 48 年 5 月 23 日
「インドネシア人ヨーロッパ留学生の思想遍歴」永積昭助教授
- 28) 昭和 48 年 9 月 26 日
「「あそび」という語の東西比較論」渡辺護教授
- 29) 昭和 48 年 11 月 14 日
「塵と文献」後藤光一郎助教授
- 30) 昭和 48 年 12 月 12 日
「因果律について」岩崎武雄教授
- 31) 昭和 49 年 1 月 23 日
「鷺の舞」赤塚忠教授

- 32) 昭和 49 年 2 月 28 日
「シルクロードの現実」榎一雄教授
- 33) 昭和 49 年 4 月 24 日
「写実の問題について
ーヴィラール・ド・オンヌクールからヴァン・アイクまで」前川誠郎教授
- 34) 昭和 49 年 5 月 22 日
「冥想の比較」玉城康四郎教授
- 35) 昭和 49 年 6 月 19 日
「沖縄の言葉」柴田武教授
- 36) 昭和 48 年 10 月 16 日
「中国考古学の旅」関野雄教授
- 37) 昭和 49 年 11 月 13 日
「コンピューターについてーミニコンピューター操作実演」田中良久教授
- 38) 昭和 50 年 2 月 5 日
「仏教の教団についてーインドの教団と日本の教団の比較」平川彰教授
- 39) 昭和 50 年 3 月 5 日
「プーシキンとミツケーヴィチ」木村彰一教授
- 40) 昭和 50 年 5 月 7 日
「遊牧国家と渡来人」護雅夫教授
- 41) 昭和 50 年 6 月 4 日
「天皇大帝と紫宮と真人」福永光司教授
- 42) 昭和 50 年 10 月 26 日
「漢訳経典の訳経上の二三の問題」高崎直道助教授
- 43) 昭和 50 年 12 月 10 日
「渡唐した人々の物語」久保田淳助教授
- 44) 昭和 51 年 1 月 28 日
「ドイツ小説研究こぼれ話
ー志賀直哉「暗夜行路」と大岡昇平「少年」」登張正実教授
- 45) 昭和 51 年 5 月 26 日
「ヘーゲルと東洋宗教」田丸徳善助教授
- 46) 昭和 51 年 6 月 23 日
「ゲーテの位置をめぐって」柴田翔助教授
- 47) 昭和 51 年 10 月 20 日
「タミル語刻文の統計的研究」辛島昇助教授
- 48) 昭和 51 年 12 月 8 日
「航空安全の問題」田中良久教授
- 49) 昭和 52 年 1 月 26 日
「蘭学と国語学」松村明教授
- 50) 昭和 52 年 2 月 9 日
「現代中国の印象」福武直教授

- 51) 昭和 52 年 4 月 27 日
「中国訪問の印象－歴史・文物を中心として－」西嶋定生教授
- 52) 昭和 52 年 6 月 22 日
「フランクリンと現代日本の若者たち」渡辺利雄助教授
- 53) 昭和 52 年 11 月 16 日
「日本社会の階層構造」富永健一教授
- 54) 昭和 54 年 2 月 7 日
「八角古墳と八稜鏡－日本の神道と中国の神道－」福永光司教授
- 55) 昭和 54 年 2 月 21 日
「尾形光琳と中村内蔵助－大和文華館蔵内蔵助像を中心に－」山根有三教授
- 56) 昭和 54 年 2 月 28 日
「トルコ語の複数と日本語の複数」柴田武教授
- 57) 昭和 54 年 3 月 14 日
「バーミアン石窟壁画管見－東と西の問題－」秋山光和教授
- 58) 昭和 54 年 6 月 6 日
「図書館の内と外－ヨーロッパでの研究所生活－」伊藤貞夫助教授
- 59) 昭和 54 年 12 月 5 日
「家族の未来像について」青井和夫教授
- 60) 昭和 55 年 2 月 20 日
「フォークナーと graphic arts (筆写 [視覚] 芸術)
－手書き原稿と初期の絵－」大橋健三郎教授
- 61) 昭和 55 年 2 月 27 日
「デューラーとジョルジョーネ」前川誠郎教授
- 62) 昭和 55 年 3 月 7 日
「先史旧世界における東と西」渡辺仁教授
- 63) 昭和 55 年 3 月 19 日
「「ハムレット」をめぐって」小津次郎教授
- 64) 昭和 55 年 7 月 2 日
「文法理論・事実・説明」長谷川欣佑教授
- 65) 昭和 55 年 11 月 26 日
「新疆の遺蹟を訪ねて」護雅夫教授
- 66) 昭和 55 年 12 月 10 日
「新儒学における理と気と天」山井湧教授
- 67) 昭和 56 年 1 月 28 日
「宗教心理研究の一動向」脇本平也教授
- 68) 昭和 56 年 3 月 9 日
「記憶の解離現象について」梅岡義貴教授
- 69) 昭和 56 年 3 月 9 日
「武勲詩管見」山田鬱教授

- 70) 昭和 56 年 5 月 27 日
「トルストイ—芸術家と思想家の間—」川端香男里教授
- 71) 昭和 56 年 6 月 24 日
「中世都市としての鎌倉」石井進教授
- 72) 昭和 56 年 12 月 9 日
「誠と愛」についての断想」相良亨教授
- 73) 昭和 57 年 1 月 13 日
「日本変造の仏教語—仏教の日本化—」田村芳朗教授
- 74) 昭和 57 年 1 月 27 日
「カントかヘーゲルか—ドイツ観念論の研究—」小倉志祥教授
- 75) 昭和 57 年 2 月 10 日
「異性の魅力の帰属錯誤説」水原泰介教授
- 76) 昭和 57 年 3 月 10 日
「感情反応の心理説」末永俊郎教授
- 77) 昭和 57 年 5 月 26 日
「推定音価からみた唐詩の音声美—班—」平山久雄助教授
- 78) 昭和 57 年 6 月 23 日
「ジャンセニスム—宗教・政治・社会—」塩川徹也助教授
- 79) 昭和 57 年 11 月 24 日
「イスラムの偶因論—ガザリーの場合—」中村廣治郎助教授
- 80) 昭和 58 年 1 月 26 日
「仏教思想における現世利益」早島鏡正教授
- 81) 昭和 58 年 2 月 25 日
「ある技術書の運命—『天工開物』と日本と中国と—」田中正俊教授
- 82) 昭和 58 年 3 月 9 日
「美学の新しい課題の中から」今道友信教授
- 83) 昭和 58 年 6 月 8 日
「自己現象をめぐる一つの視角
—日本的自己および宗教的実存を事例として—」吉田民人教授
- 84) 昭和 58 年 6 月 22 日
「広開土王碑文研究の現状」武田幸男教授
- 85) 昭和 58 年 10 月 26 日
「三階教と浄土教—凡夫の仏教の二途—」木村清孝助教授
- 86) 昭和 59 年 1 月 25 日
「源氏物語の主人公」秋山虔教授
- 87) 昭和 59 年 2 月 8 日
「役割の意識と日本の思想」尾藤正英教授
- 88) 昭和 59 年 3 月 14 日
「ドイツ語単語の意味の変遷について」浜川祥枝教授

- 89) 昭和 59 年 5 月 23 日
「熊とイコンロシアにおけるキリスト教と異教の混淆現象の一面」栗原成郎助教授
- 90) 昭和 59 年 6 月 20 日
「国語研究室所蔵の古写本類」築島裕教授
- 91) 昭和 59 年 10 月 31 日
「昭和史研究をめぐって」伊藤隆教授
- 92) 昭和 59 年 12 月 12 日
「公とおほやけ」溝口雄三教授
- 93) 昭和 60 年 2 月 6 日
『『リアリティ』というについて』山本信教授
- 94) 昭和 60 年 2 月 20 日
「リルケとツェラン」生野幸吉教授
- 95) 昭和 60 年 5 月 8 日
「グリムと言語学」風間喜代三教授
- 96) 昭和 60 年 6 月 19 日
「藤原定家 —中世都市人の生活と文学—」久保田淳教授
- 97) 昭和 60 年 12 月 4 日
「先祖崇拜について」柳川啓一教授
- 98) 昭和 61 年 1 月 22 日
「古寺経蔵典籍調査と国語史学」築島裕教授
- 99) 昭和 61 年 2 月 5 日
「西本願寺大谷家寫字台文庫旧蔵唐山戯曲小説書について
—某上人蒐集コレクションの素性及びその行方—」伊藤漱平教授
- 100) 昭和 61 年 2 月 19 日
「『いいわけ』の心理と論理」辻村明教授
- 101) 昭和 61 年 3 月 19 日
「諸行無常ということ—「空」の意味について—」山口端鳳教授
「風狂の反近代 —瀬上隠士と醉多道士—」三好行雄教授
- 102) 昭和 61 年 5 月 7 日
「東大構内梅之御殿跡の発掘調査について」上野佳也教授
- 103) 昭和 62 年 2 月 4 日
「新しい社会運動の理論モデルと実態」高橋徹教授
- 104) 昭和 62 年 2 月 18 日
『『大乘起信論』研究雑感—インド仏教学と中国仏教—』高崎直道教授
- 105) 昭和 63 年 2 月 3 日
「知覚と記憶のあいだ」大山正教授
- 106) 昭和 63 年 2 月 17 日
「近世における公共の概念」成瀬治教授
- 107) 昭和 63 年 6 月 8 日
「寛永のオランダ使節と東アジア型外交」永積洋子助教授

- 108) 昭和 63 年 11 月 16 日
「Vampirism について」 栗原成郎助教授
- 109) 平成 1 年 3 月 8 日
「中央アジアの印欧語トカラ語」 風間喜代三教授
- 110) 平成 1 年 9 月 27 日
「歴史としてみた文化交流研究施設」 山本達郎名誉教授
- 111) 平成 2 年 3 月 7 日
「日本語表現の特色」 國廣哲弥教授
- 112) 平成 2 年 3 月 19 日
「1916 年復活祭反乱と詩人イエイツ」 高松雄一教授
- 113) 平成 3 年 1 月 23 日
「考古学でまだ分からないこと」 上野佳也教授
- 114) 平成 3 年 2 月 6 日
「愛を掴む - 戦争と愛 -」 原實教授
- 115) 平成 3 年 2 月 20 日
「テキスト：伝承と幻影」 久保正彰教授
- 116) 平成 3 年 3 月 6 日
「シャンカラ - その人と思想 -」 前田専学教授
- 117) 平成 3 年 8 月 18 日
「宗教は消滅するか？ - 世俗化論をめぐって -」 田丸徳善教授
- 118) 平成 3 年 6 月 5 日
「東南アジアの農業のインド化」 桜井由躬雄教授
- 119) 平成 3 年 11 月 6 日
「情報と自己組織性」 吉田民人教授
- 120) 平成 3 年 11 月 20 日
「道徳性 - 価値観の社会心理学的基礎について -」 古畑和孝教授
- 121) 平成 3 年 12 月 4 日
「存在は命題関数の性質である」という哲学説について」 渡邊二郎教授
- 122) 平成 3 年 12 月 18 日
「経史について」 戸川芳郎教授
- 123) 平成 4 年 1 月 8 日
「美と真実 - 西洋と日本の美意識」 高階秀爾教授
- 124) 平成 4 年 2 月 5 日
「戦後日本の社会階層とその変動 1955 年 - 1985 年」 富永健一教授
- 125) 平成 4 年 2 月 19 日
「東大文学部に在籍した中国の文学者・その後」 丸山昇教授
- 126) 平成 4 年 3 月 4 日
「呪術（シャーマニズム）と幻覚剤 - アジア・アフリカ編」 狩野千秋教授
- 127) 平成 4 年 3 月 18 日
「中世都市としての鎌倉」 石井進教授

- 128) 平成4年11月25日
「ある御公家さんの東下り紀行」森川 昭教授
- 129) 平成4年1月13日
「古代の東国と東北」笹山晴生教授
- 130) 平成4年1月20日
「フランス革命と現代」遅塚忠躬教授
- 131) 平成5年2月3日
「昭和天皇をめぐる」伊藤隆教授
- 132) 平成5年2月17日
「浮世絵春画について」辻惟雄教授
- 133) 平成5年3月3日
「吾れ我を喪（わす）るー古代中国語の二つのワレをめぐるー」平山久雄教授
- 134) 平成5年12月22日
「エトノスからポリスへーポリス成立論の試みー」伊藤貞夫教授
- 135) 平成6年2月2日
「ペテルブルクとヴェネツィアー幻想文学の背景」川端香男里教授
- 136) 平成6年2月16日
「富士山と隅田川」久保田淳教授
- 137) 平成6年3月2日
「カレーライスとインド刻文学」辛島昇教授
- 138) 平成6年3月16日
「落語『死神』のルーツ」西本晃二教授
- 139) 平成7年1月11日
「絵画史における日中関係」戸田禎祐教授
- 140) 平成7年1月18日
「番仔契について」土田滋教授
- 141) 平成7年2月1日
「前近代におけるイギリスとヨーロッパ」城戸毅教授
- 142) 平成7年2月15日
「日本人と中国人ー価値とライフスタイルの国際比較ー」飽戸弘教授
- 143) 平成7年3月1日
「ゲーテ読解の視座の変遷ー私的研究小史ー」柴田翔教授
- 144) 平成7年3月15日
「『花郎世紀』の朝鮮古代世界ーもうひとつの真偽論」武田幸男教授
- 145) 平成7年7月5日
「世界文学とはなにか」沼野充義助教授
- 146) 平成8年1月10日
「〈わかり合い〉の限界について」坂部恵教授
- 147) 平成8年1月17日
「近代日本の神国観」高木昭作教授

- 148) 平成8年1月31日
「景観の思想」佐藤正英教授
- 149) 平成8年2月14日
「江戸の漢学と国学」山口明穂教授
- 150) 平成8年2月21日
「翻訳の功罪－アメリカ文学の場合」渡邊利雄教授
- 151) 平成8年3月6日
「1851 ロンドン万国博をめぐって」海老根宏教授
- 152) 平成8年11月20日
「ユーラシアの東、西」藤本強教授
- 153) 平成8年12月18日
「会社の誕生」高村直助教授
- 154) 平成9年1月22日
「正岡子規について」野山嘉正教授
- 155) 平成9年2月5日
「情報機器利用能力－情報リテラシーの中核」鈴木裕久教授
- 156) 平成9年2月19日
「間柄の世界」濱井修教授
- 157) 平成9年3月5日
「記憶と睡眠・・脳と心の酒の肴になる話」二木宏明教授
- 158) 平成10年2月4日
「中国、都市の二つの景観－城壁と路地－」尾形勇教授
- 159) 平成11年1月13日
「マモンの神－ラスキンとターナー－」富士川義之教授
- 160) 平成11年1月27日
「古代の女歌」鈴木日出男教授
- 161) 平成11年2月10日
「善珠僧正の書架」白藤禮幸教授
- 162) 平成12年2月16日
「社会的自我の展開」船津衛教授
- 163) 平成12年7月5日
「中世シチリアの異文化交流」高山博助教授
- 164) 平成12年9月27日
「目が合うってほんとかしら」佐藤隆夫教授
- 165) 平成12年10月25日
「ユダヤ人にとっての聖書」市川裕教授
- 166) 平成12年11月22日
「和歌の永続性について」渡部泰明教授
- 167) 平成13年1月24日
「アフリカ・バントゥ諸語の調査」湯川恭敏教授

168) 平成 13 年 2 月 21 日

「無常について」木村清孝教授

V 研究プロジェクト

1. 研究助成・共同研究等一覧

- 1) 1978-1979 年度 住宅総合研究財団「類型学」的方法による古代都市住居の研究（1）
ーポンペイを中心にしてー」、「住宅の類型的分析についての研究
（2）ーローマのスキエラ型リネア型住宅の発展過程ー」（青柳・研
究代表者）
- 2) 1980-1982 年度 文部省科学研究費・海外調査「シチリアの古代ローマ美術・考古学
調査」（青柳・研究代表者、調査地：アグリジェント近郊レアルモ
ンテ村のローマ帝政期の別荘遺跡）
- 3) 1982-1983 年度 三菱財団人文科学研究助成「シチリアにおける古代建築の研究」（青
柳・研究代表者）
- 4) 1984-1986 年度 文部省科学研究費・海外調査「第5次シチリアの古代ローマ美術・
考古学調査」（青柳・研究代表者、調査地：アグリジェント近郊レ
アルモンテ村のローマ帝政期の別荘遺跡）
- 5) 1986-1987 年度 文部省科学研究費・一般 B「15 世紀ルネッサンス美術と古代石棺彫
刻」（青柳・研究代表者）
- 6) 1988 年度 トヨタ財団研究助成「新しい人間社会の探求」・個人奨励研究「ノ
ルマン・シチリア王国の統治構造ーラテン、イスラム、ビザンツ文
化の接触・相互影響下の行政制度」（高山・研究代表者）
- 7) 1990-1992 年度 鹿島学術財団研究助成「文化財保存と現代社会」（青柳・研究代表者）
- 8) 1991 年度 文部省科学研究費・総合 B「文化財と現代社会」（青柳・研究代表者）
- 9) 1991 年度 文部省科学研究費・総合 A「「地中海世界」における環境と人間：景
観・文化・人間類型の比較総合研究」（高山・研究分担者）
- 10) 1991 年度 文部省科学研究費・奨励 A「十一・十二世紀におけるノルマン人の
南イタリア支配ー異文化接触と行政」（高山・研究代表者）
- 11) 1991 年度 三菱財団人文科学研究助成「南イタリア・シチリアに残存するアラ
ビア語、ギリシャ語、ラテン語中世史料の研究」（高山・研究代表者）
- 12) 1991-1992 年度 平和中島財団研究助成「イタリアの文化財行政に関する研究」（青柳・
研究代表者）
- 13) 1992-1995 年度 東京外国語大学アジア・アフリカ研究所「イスラム圏における異文
化接触のメカニズムー人間動態と情報に関する総合的研究」（高山・
共同研究員）
- 14) 1992-1994 年度 文部省科学研究費・国際学術調査「イタリア中部の古代ローマ美術・
考古学調査」（青柳・研究代表者、調査地：タルクィニア近郊のカ
ッツァネッロのローマ遺跡）
- 15) 1992-1993 年度 放送教育開発センター「学部専門教育カリキュラムの研究開発（史
学概論）」（高山・非常勤講師）
- 16) 1993 年度 文部省科学研究費・総合 A「地中海世界における「国民国家」と地

- 域間「ネットワーク」(高山・研究分担者)
- 17) 1993 年度 日本小型自動車振興事業「民族と国家の文明史的研究」(高山・研究委員会委員)
 - 18) 1994-1995 年度 鹿島美術団研究助成「ポンペイ壁画のデータベース構築に関する研究」(青柳・研究代表者)
 - 19) 1995-1997 年度 文部省科学研究費・国際学術調査「イタリア中部の古代ローマ美術・考古学調査」(青柳・研究代表者、調査地：タルクィニア近郊のカツァネッロのローマ遺跡)
 - 20) 1995 年度 国際交流基金フェローシップ事業助成金「13 世紀におけるフランス地方行政制度の確立過程」(高山・研究代表者)
 - 21) 1995 年度 村田学術振興財団研究助成「中世フランスの統治システムー中世西欧の統治システムの比較研究ー」(高山・研究代表者)
 - 22) 1997-1999 年度 文部省科学研究費・基盤 C2「中世フランスの王権と諸侯ー統治システムの比較研究ー」(高山・研究代表者)
 - 23) 1997-1998 年度 文部省科学研究費・創生的基礎研究費「現代イスラーム世界の動態的研究」(高山・研究分担者)
 - 24) 1998-2000 年度 文部省科学研究費・国際学術調査「イタリア中部の古代ローマ美術・考古学調査」(青柳・研究代表者、調査地：タルクィニア近郊のカツァネッロのローマ遺跡)
 - 25) 1998-2000 年度 文部省科学研究費・基盤 B2「西欧の歴史世界とコミュニケーション」(高山・研究分担者)
 - 26) 1999-2003 年度 文部省科学研究費・中核的研究拠点 COE 形成基礎研究費「象形文化の継承と創成に関する研究」(青柳・研究代表者、高山・研究分担者)(2002 年度より特別推進研究に移行)
 - 27) 2000-2002 年度 三菱財団人文科学研究助成「中世シチリア王国の地方行政制度」(高山・研究代表者)
 - 28) 2001-2003 年度 文部省科学研究費・基盤 A2「地中海世界における社会変動と識字率」(高山・研究分担者)
 - 29) 2001-2003 年度 文部省科学研究費・基盤 B2「ヨーロッパにおける宗教的寛容と不寛容の生成・展開に関する比較史的研究」(高山・研究分担者)
 - 30) 2002-2004 年度 文部省科学研究費・国際学術調査「イタリア中部の古代ローマ美術・考古学調査」(青柳・研究代表者、調査地：タルクィニア近郊のカツァネッロのローマ遺跡)
 - 31) 2002-2005 年度 文部省科学研究費・基盤 C2「中世イギリスの統治システムー中世西欧の統治システムの比較研究」(高山・研究代表者)
 - 32) 2002-2005 年度 文部省科学研究費・基盤 A1「近世・近代ヨーロッパの政治社会」(高山・研究分担者)

2. 大規模プロジェクトの概要

2.1 ポンペイの古代住宅に関する調査研究（1973～1976）（青柳）

東京大学文学部文化交流研究施設にポンペイ遺跡発掘調査チームを設置し、ポンペイ遺跡内の「エウローパの舟の家」の発掘調査研究を行う。この調査研究によって、ポンペイ東南域が紀元前2世紀から都市整備計画が開始されたとする従来の学説に対して、紀元前3世紀からすでに整備計画が実施されていたことを証明する。また、同家は62年のポンペイを襲った直下型地震によって被害を被り、工房として再建中であったが、79年の埋没時までには工事が完了していなかったことも証明した。

調査研究の成果は、『エウローパの舟の家』東京大学文学部、1977を中心に公表。

2.2 シチリアのローマ時代別荘に関する調査研究（1980～1986）（青柳）

イタリア半島およびシチリア島におけるローマ時代の住宅を比較研究するという目的のために、上記ポンペイ遺跡の調査研究に続いてシチリア島の南海岸にあるアグリジェント近郊のローマ別荘を発掘調査研究した。この地域は紀元前6世紀末から第2次ポエニ戦争までが繁栄期であり、それゆえにギリシア文化の研究は盛んであるが、ローマ時代に関しては十分な研究がなされていなかった。アグリジェントの西約10キロのレアルモンテにあるローマ別荘の発掘調査研究はそのような研究上の空白を埋める目的も有していた。

当該別荘遺跡は海岸に位置するため保存状況はけっして良好とはいえなかったが、数多くの舗床モザイクが出土し、様式、制作年代、技法、装飾モチーフ、石材等に大きな変化が認められた。制作年代は1世紀から4世紀の約350年間におよんでおり、都ローマの影響が2世紀中ごろからは北アフリカの影響が顕著となる推移をたどることができた。また、2世紀初頭までは色大理石が不足していたため、川石を切断して使用する特殊な技法と石材使用も明らかにした。

当該別荘は国道によって分断されているため、海岸よりの部分しか発掘調査を行うことはできず、それゆえに全体規模を確認することも困難であったが、出土範囲のなかで浴場施設が約6割を占めていた。冷浴室、微温浴室、熱浴室などを完備した浴場施設は少なくとも3次の改修を経ており、約35年間の使用期間中、つねに別荘の中核的施設であることが判明した。それゆえ、アグリジェント（当時はアグリゲントウム）のような都市に住む富裕市民の郊外別荘としての機能を有していた可能性が高く、都市アグリジェントの勢力範囲を明らかにする一助となった。また、住宅タイプとしては、ポンペイ住宅に見られるアトリウムがないことから、ヘレニズム建築の特質をローマ時代になっても維持していたと考えられる。調査研究の成果は、概報『アグリジェント近郊ローマ帝政期別荘』1981, 1983, 1985を中心に公表。

2.3 カツァネッコのローマ時代別荘に関する調査研究（1992～）（青柳・松山）

上記ポンペイ遺跡、アグリジェント近郊の調査研究では南イタリアのカンパニアとシチリア島での住宅を研究することができた。イタリア半島およびシチリア島におけるローマ時代の住宅を比較研究するという目的のためには、中部イタリアのローマ時代住宅を調査研究する必要があり、そのために開始したのがローマから北へ約 100 キロの地点にある当該別荘である。そこはエトルリア時代から栄えたタルクィニアからさらに北西約 20 キロの海岸にある海浜別荘であり、立地条件はアグリジェント近郊の別荘と類似している。1992 年の第一次から今年まで 11 次にわたる調査を継続しており、現在まで約 4,000 平方メートルの範囲を発掘したが、いまだ遺構の全体を発掘したわけではない。地中レーダーやボーリング調査によって遺構全体は 6000 m²ほどの広がりをもつことが判明しているものの、土地の現所有者サケッティ侯爵が現在使用している建物などがあるため発掘範囲の拡大は限界にきている。

これまでの調査で、三葉形や八角形の大広間、列柱回廊のめぐる長方形の中庭、海に向かって開いている半円形の広大な回廊、それに入り組んだ構成をしめす浴場施設などが出土している。これらの建築遺構はタルクィニア周辺でとれる凝灰岩やネンフロと呼ばれる粘板岩のブロックを主な建材としているが、煉瓦を併用している部分もあり、長期にわたる増改築が行われたことが判明している。たとえば 5 世紀に造られたと考えられる三葉形大広間の床下からは 1 世紀の白黒モザイクが出土しており、半円形の広大な回廊で囲まれた中庭からは 1 世紀と推定される浴場が今年発見された。また、回廊の南側にある浴場施設では放棄された浴場のうえにあらたな浴場がセヴェルス時代に建設された部分もあり、それぞれの建築年代を確定しながら各段階の建築プランを復元することが当面の重要課題となっている。

三葉形大広間や長方形中庭の回廊は舗床モザイクで装飾されており、単純な幾何学モチーフや狩猟場面をあらわす具象モチーフ、白黒モザイクと多彩モザイクなどさまざまな技法と様式のモザイクが発見されている。これらはいずれも一辺が 1 センチ程度のサイコロ状の切石を敷き詰めたオプス・テッセラトゥム opus tessellatum という技法のモザイクであるが、大理石や色石の薄い石板を装飾モチーフの形に合わせて切りとり、それらをつなぎ合わせた嵌め込みモザイク(オプス・セクティレ opus sectile)も数カ所で出土している。興味深いのは、これらの嵌め込みモザイクのうち石灰岩を用いたモザイクである。共和政末期、この地方では大理石の入手がむずかしく、大理石の代わりに石灰岩を使用せざるを得なかったためと推定されるだけでなく、その後使用されるようになる大理石の採石場を特定することができれば、この地方の経済圏の解明にもつながるため、周辺の出土例を収集中である。さらに、装飾モチーフや技法から、少なくとも 5 期に分類できる出土モザイクの制作年代幅は約 5 世紀間にもおよび、同一地点からこれほどの年代幅をもつモザイクが出土した例はすくなくともイタリア中部においてはほかに例がなく、エトルリア南部のローマ時代モザイクの推移を研究するうえで重要な学術上の指標となるであろう。

これ以外に 300 点をこす青銅製の貨幣、彫刻や壁画の断片、ガラス製や青銅製の容器、北アフリカでつくられたアンフォラ型の壺、日常使用された素焼きの食器などが大量に出土し、タルクィニアの旧礼拝堂を整備した倉庫に保管されている。また、タルクィニア国立博物館には、1956 年にこの遺跡から偶然発見されたガッリエヌス時代 (253-268 年) に属す

る等身大の女性大理石像が収蔵されている。

以上の建築遺構や出土遺物からこの別荘遺跡の創建年代は紀元前1世紀後半の共和政末期にさかのぼり、6世紀ころまで使用されていたことが明らかとなった。約600年にもわたって活用されたローマ時代の別荘はイタリア半島でもまれな例であり、とくにイタリア中部では唯一といってもよい遺構である。直線を多用した単純な平面プランの初期段階から、三葉形大広間のような曲線や多角形の広間が多くなる後期段階までの建築的推移をたどることができるだけでなく、日常使用されていた陶器や運搬用の大型陶器の形式変遷を長期にわたって解明することが可能である。それ故、建築史、考古学、美術史などの観点から欧米でも注目を集める発掘調査となっており、2005年には調査の成果を中心とする展覧会を、タルクィニア国立博物館で開催する予定である。

調査研究の成果は、*Annual report of the institute for the study of cultural exchange* に概報として逐次公表。

2.4 象形文化の継承と創成に関する研究（青柳・高山）

（中核的研究拠点 COE 形成基礎研究費、2002 年度より特別推進研究に移行）

1 研究目的

〈現状認識〉高度情報化社会においては、情報科学の技術的進展に応じて情報通信基盤の整備だけでなく、情報の内容（コンテンツ）が重視されるようになるのは必然であるが、近年喧伝されている「コンテンツ重視」の主張は、ともすれば、情報の量的増大のみを招来するに留まっている。他方、情報の出典の検討と情報の質の検証という観点からみれば、人文学は対象とする原資料ごとにその基本的操作法を方法論として既に確立している。

〈コンテンツに対する人文学の寄与〉本研究は以上のような現状認識に立って、高度情報化社会において最も重要なものとなる情報のコンテンツに対して、基礎研究である人文学の立場から良質なコンテンツ作製に寄与することができる。研究の機軸とするのは、人文学がその基盤として確立してきた原資料批判の方法論（史料学・文献学を含む資料学）を再認識して総合し、その総合の上に立ってコンテンツの学としての情報学と融合させることにある。そのために、これまで人文学で確立されてきた原資料批判の方法論とその成果の蓄積である学術情報を、人文学の基本的な方法論の観点から更なる体系化と統合化を行い、象形文化アーカイヴへと集約し、多くの研究者が利用可能なデータベースとする。

〈象形文化アーカイヴの構築〉造形・画像資料など象形文化資料がもつ物証性に関してはこれまでも十分な評価がなされ、それ故に考古学や美術史学が発達してきた。それらの学問では個々の造形・画像資料を「読み込む」ことによって、あるいは「解説」することによって資料としての価値を付与してきたのである。しかし、個々の資料を読み込み、あるいは解説することは研究者の営為に託され、それ故に客観性を欠くことも皆無とはいえない状況である。本研究における目的の一つは、そのような恣意性を無くすため、象形文化資料をアーカイヴとして集積することによって資料体としての体制を与え、そのことによってその内部で

比較、組合せ、あるいは抽出を可能とし、資料自らが「語る」ことを象形文化アーカイブの機能として付与することにある。このことによって、これまでテキスト資料が優位を占めていたある文化相の再構築においても象形文化資料がテキスト資料と同等の役割を担うことが可能となり、性格の異なる資料の比較検討と相互補完によって文化相の再構築をより立体的かつ実相に即したものにすることを可能とする。

〈継時的研究と共時的研究の融合〉ある時代、文化、社会の復元、つまり文化相の再構築にはこれまで文字資料（碑文、文書、文献等）を中心とした継時的研究 diachronic study によって文化相の生成や変遷の過程が明らかにされてきた。「記述」という継時性を本質的に内在する文字資料に基づく研究であるから当然の帰結である。しかし、ある特定の時点において、歴史的個体は継時性のもとにあると同時に共時性の空間のなかにおかれている。本質的に共時的である象形文化資料はこの分野の中核的資料となりうる。その可能性が認識されていたにもかかわらず、膨大な数の資料を操作する必要があり、実際上不可能な研究方法であった。しかし、最近の情報処理の発達によってデジタル画像であればこの課題を克服することが可能となった。象形アーカイブ構築の目的は、共時的研究 synchronic study を推進するための基盤構築なのである。

2 研究の進捗状況

2.1 研究の現状（全体計画における研究の達成度）

2.1.1 象形文化アーカイブ構築のための各種資料の収集・整理・記載

ローマに現存する古代の遺構・遺物等の文化財および歴史的景観の写真撮影を行い、4,168点を収集し、それらの整理・記載を行う。ポンペイに関しては資料収集のための写真撮影チームを派遣し 10,981 点の写真、ビデオ 58 時間相当、QTVR 約 37 件を入手し、整理・記載を行う。以上の作業にはナポリ大学よりイタリア人研究者を招聘し、協力を得た。なお、ローマ、ポンペイいずれの場合も学術上の使用及びインターネットによる発信に関して一定範囲内の著作権を確保した。

	銀塩写真	デジタル化	記載	サーバ入力
Pompei	10,981	12,229	9,855	9,873
Roma	4,168	3,927	996	2,982
地中海世界	3,794	3,644	3,581	3,570
文書・文献	2,397	2,356	2,289	2,205
日本近世文化等	2,946	2,824	1,134	2,741
合計	24,286	22,624	17,855	21,371

図表 1 収集写真、デジタル化、記載、サーバ入力の画像点数

2.1.2 学術資料としてのアナログ写真とデジタル画像の比較研究

すでに撮影した被写体を観察しながら、アナログ写真とデジタル画像の画質を比較研究すると同時に、保存・分類・比較等の要件にそれぞれがどのような特性を有しているかを検討している。この比較研究で浮上してきたのがデジタル画像の保存と真正性 authenticity に関する問題である。デジタル情報を保存するデジタル・メディアとしては磁気テープ、フロッ

ピーディスク、ハードディスク、CD、DVD などがあり、100 年を超える耐久性があるとされている。しかし、これらはハードウェア、ソフトウェアに依存しており、さらにハード、ソフトとも経済市場に依存しているのである。このため、もしデジタル・メディアが 100 年以上の耐久性を有するとしても、ハード、ソフトが数年の市場価値しかもたない場合、実際には 10 年ほどの使用可能期間しかないことになる。このため、本プログラムでは、可能な限りハード、ソフトに依存しないデジタル情報としての保存、および複数のデジタル・メディアで資料の保存を行っている。さらに画像に関しては、オリジナル資料としての銀塩写真の保存にも留意している。真正性に関して、加工の容易なデジタル画像は本質的な脆弱さをもっており、改竄される危険をつねに有している。このためオリジナル資料としての銀塩写真との参照が必要とされるのである。デジタル画像の保存と真生性に関する問題の解決には文書・文献等のアナログ資料の保存法と研究法を参考に、デジタル資料を対象とする資料学を構築する必要がある。つまり、造形資料や碑文に関しては考古学・美術史・碑文学があり、その保存整理については博物館がある。また古文書に関しては古文書学があり、保存整理等については文書学が確立されている。もしデジタル資料をオリジナル資料もしくは一次資料とするのであれば、それを対象とする資料学、保存整理学の分野を確立することが肝要であり、それらが確立するまでは、これまでの資料学、資料保存学を活用したデジタル文献学、デジタル図書館学のような過程段階としての分野を育成することが必要であろう。

2.1.3 象形文化アーカイブ構築のための記載方法の研究

銀塩写真・デジタル画像の学術資料化に必要な多国語による記載の要件と方法を抽出サンプルにもとづきながら研究中である。とくに各国語によって異なる地名などの固有名詞については、対照表に基づく辞書を象形文化アーカイブに内蔵することも検討中である。

モデル研究としての古代ローマ文化の復元に関する記載言語はイタリア語を主要言語とし、必要に応じて英、独、仏語を使用している。記載内容に関しては以下の通りである。

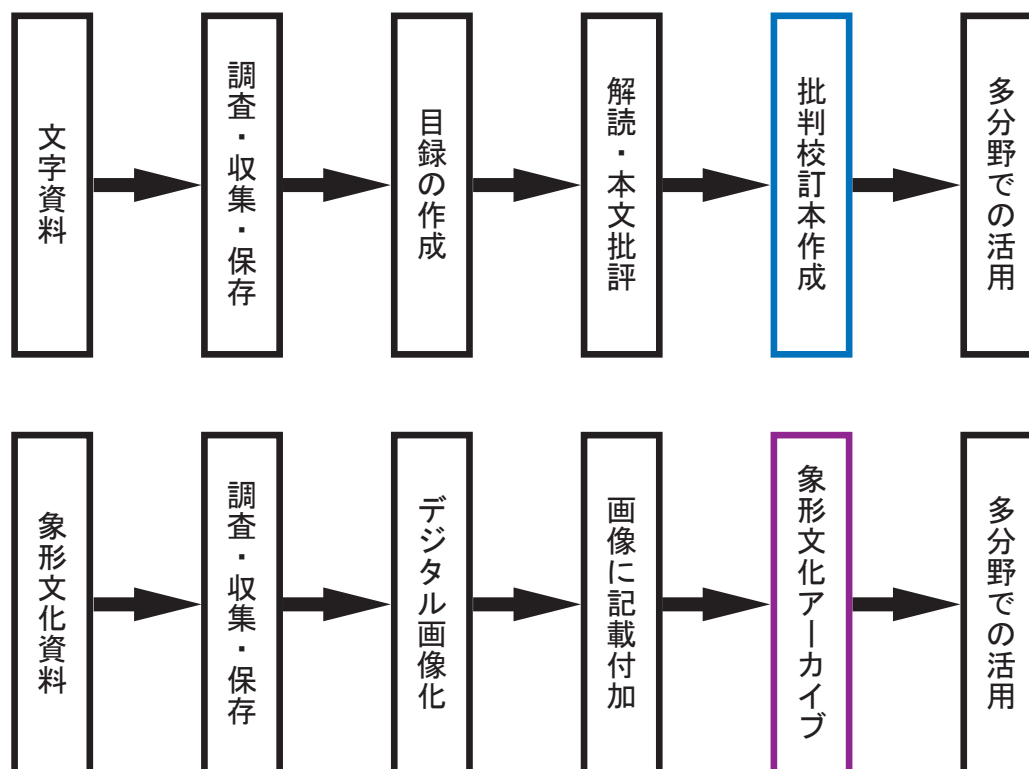
項目	内容
N.File-N.Categ.-N.Res.-N.foto 写真番号	0012-01-0000-0568
Fotografo 撮影者	Giuseppe Stuto
Data ripreso 撮影日	010810
Diritto di autore 著作権	Uso scientifico, Internet
Sito 地名	Napoli
Collocazione o Museo 所蔵先	Muzeo Nazionale di Napoli
Edificio o Oggetto 建物・作品	Casa di Poeta Tragico
Ambiente o Provenienza 部屋・由来	Tablino I
Soggetto 主題	Processione dionisiaca
Classificazione 分類	Pittura
Descrizione-Annotazione-Bibliografia 記述・注記・文献	Pittura centrale della parete Ovest del tablino I. Dioniso con Sileno e Menade. Quarto stile. Maiuri 1964, pp.89-92.
Cronologia 制作年代	69-79 d.C.
Sigla e data 記載者・日付	D. E 010921
Revisione 確認	M. A. 011028

図表 2 記載例

記載に関してもっとも重要な課題は固有名詞の表現である。Roma, Rome, Rom あるいは Giulio Cesare, Julius Caesar など言語により表記が異なるため、できるかぎりギリシア語（ローマナイズする）、ラテン語表記を記入し、各国語による対応表を検索エンジンに含ませ

ることになっている。日本近世文化関係の記載に関しては地名表記に多数の漢字、異体字が必要のため、ISO10646、UNICODE、UT フォント、「超漢字」の活用を検討しているが、インターネット上での検索にいかに対応するかなど多くの問題がなお未解決である（本プログラムだけでなく、漢字を用いた文字データに関する検索すべてに共通する課題である）。

デジタル画像に付与する記載は画像が有する属性を規定するが故に、画像の検索先としての役割ももつ。画像自体による検索である画像検索がいまなお十分な確率を獲得していないためである。さまざまな検索に対応できることを想定して記載を付与するには、使用単語等に記載者の恣意的な情報が混入しないよう、記載者とは異なる研究者による確認が必要であり、このこともこれまでの人文科学が蓄積してきた文字資料に関する学術上の操作を参考としている。文字資料とデジタル資料の学術上の操作を対比するなら次のようになる。



図表3 文字資料と象形文化資料の学術上の操作比較

上の図からも明らかなように、デジタル画像に記載を付加する行為は、文字資料における解読・本文批評に相当する行為であり、それ故に学術上認知された用語を使用することが必要となるのである。また、象形文化アーカイブの構築は批判校訂本作成と同様、他分野の活用を可能とする方策でもある。

2.1.4 象形文化アーカイブのアーキテクチャに関する研究

大規模画像データベースを核とする象形文化アーカイブのアーキテクチャに関して、日立製作所試作開発エンターとの共同研究開発によって全体スキームと表示法・検索法を試作した。表示法に関しては同センター開発のDIS方式を利用することにより高画質の画像を確保することに成功した。また現在、日本語を含む多国語使用を前提として開発研究を行っている。この開発研究においては、画像データの検索システムの構築だけでなく、検索に使用

可能な「共通言語」の策定、画像データの属性の増大など将来の研究データとして活用しうる方策導入を目標に入れている。

2.1.5 文書・文献資料の象形文化アーカイヴへの導入・活用方法に関する研究

文書・文献資料を写真撮影し各種のデジタル化を行うことによって、また文字のデジタル化によって象形文化アーカイヴへいかに導入し、活用し得るかを研究中である。

3 これまでの研究成果

3.1 象形文化アーカイヴの構築

上記のごとく（図表 1）、約 24,000 点の写真撮影もしくは収集を行い、そのうちの約 22,000 点をデジタル化しサーバに収納した。サーバ収納の画像データおよび記載データの一部はデータベースとしての検索・抽出が可能となっている。

この検索・抽出のために、所在地、所在箇所、主題などの名称や年代などでデータを操作できる検索・抽出システムを開発した（日立製作所試作開発センターとの共同研究）。ローマ、ポンペイそれぞれの検索・抽出システムとも 6 階層からなり、各階層の内容は以下の通りである。

	第 1 階層	第 2 階層	第 3 階層	第 4 階層	第 5 階層	第 6 階層
Roma	イタリア地 図	ローマ 周辺地図	都市図	区域	建物	部屋
Pompei	イタリア地 図	都市図	街区地図	小街区	住宅	部屋

図表 4 ローマ・ポンペイの検索・抽出システムの階層構造

また、大規模な象形アーカイヴをインターネット上で公開する方法、とくに検索・抽出を容易にするシステムをインターネットで公開し、その改善を進めるため、現在試行中である。

3.2 象形文化アーカイヴを活用した研究

象形文化アーカイヴの集積データを用いて、コンピュータ・グラフィックによる「ジュリオ・ポリビオの家」確執の壁画に関する紀元 79 年噴火直前の状況復元を 78 点行った。現状と復元図は以下の通りである。



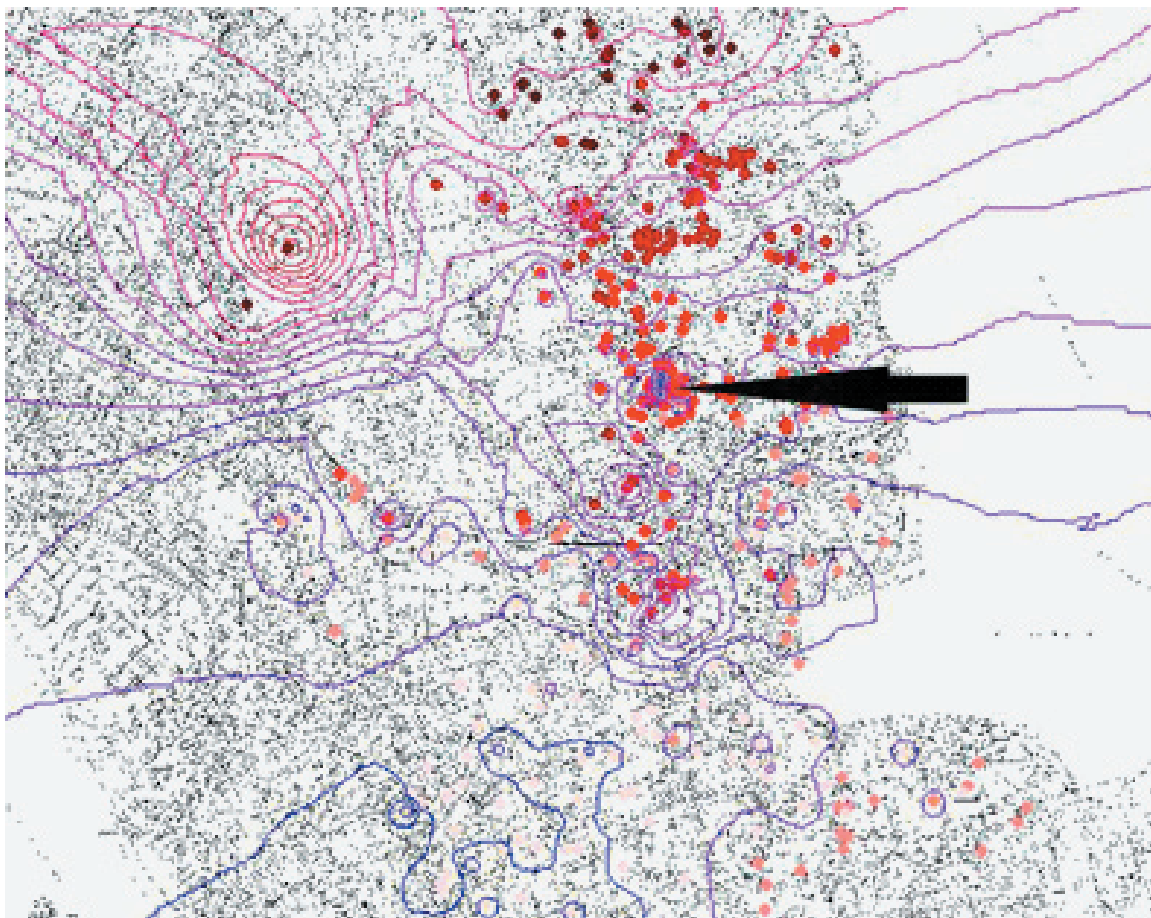
図表5「ジュリオ・ポリビオの家」宴会の間、北壁と東壁



図表 6 「ジュリオ・ポリビオの家」宴会の間 CG、北壁の 79 年噴火直前の復元

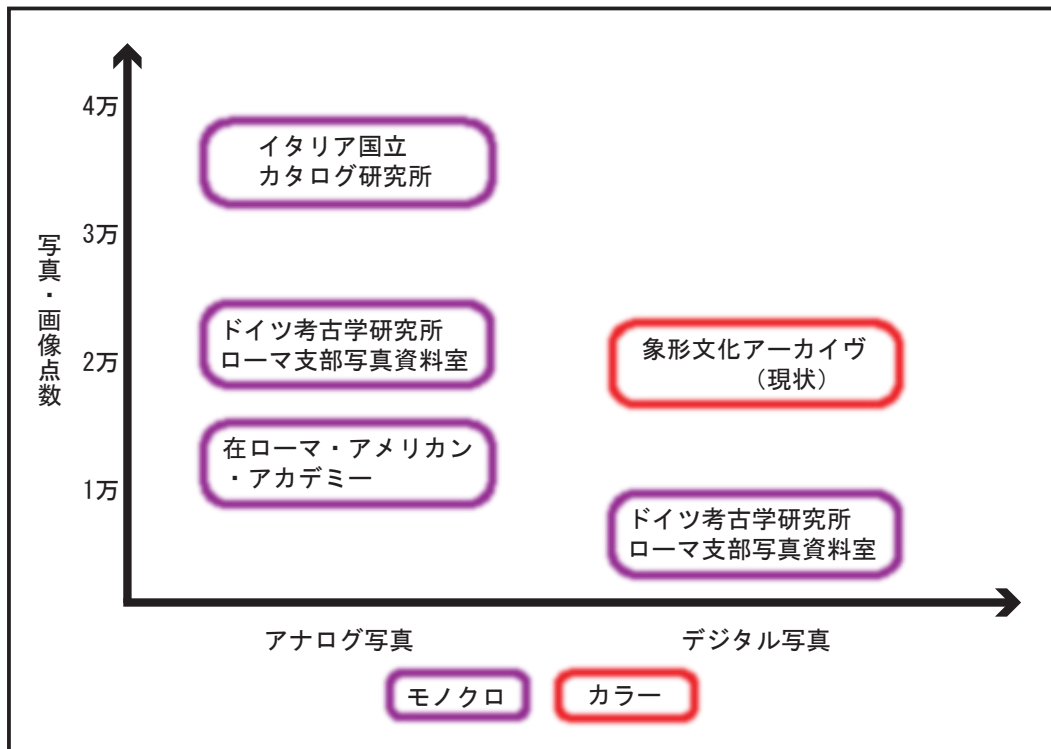
さらに、これらのCGを利用してウォークスルーのCD-Romとビデオを制作した（このビデオは2002年7月のアテネにおけるInternational Meeting of Archaeological Film of the Mediterranean Area (AGON)で特別賞受賞）。ウォークスルー版は研究用インデックスとして活用できる方策を目下研究中である。また、象形文化アーカイブを活用して「ジュリオ・ポリビオの家」の発掘日誌と研究集会の成果報告をポンペイ発掘考古局との共同出版として公表した（Casa di Giulio Polibio – Giornale di Scavi 1966/1978, Pompei 2001, pp. 307 ; Casa di Giulio Polibio – Studi interdisciplinari, Pompei 2001, pp.215.）。

このほか、象形文化アーカイブの資料をGISで解析し、79年噴火直前のポンペイ周辺地形図を作製した。



図表7 79年噴火直前のポンペイ周辺地形図

なお、現在の象形文化アーカイブが収納する約2万1千点のデジタル画像の規模はドイツ考古学研究所ローマ支部写真資料室のモノクロ写真点数に約2千点劣るが、9割以上がカラーであり、しかもデジタル画像である（対応する銀塩フィルムも保存している）。研究者の利便性を考慮するなら大きな長所を有していると考えられる。



図表 8 象形文化アーカイヴの規模

3.3 文献資料の象形文化アーカイヴへの導入・活用方法に関する研究

18 世紀に制作されたピラネージの版画は当時のローマやポンペイの遺構・出土品がどのような状態であったのかを知る上で貴重な資料である。その版画集 *Opere di Giovanni Battista Piranesi, Francesco Piranesi e d'altri, vols.29, Paris 1835 ~ 1839* に収録された 1440 点の版画に対応する現状の写真を収集し、200 年のあいだにどのような経年変化が生じたのか、また、古代文化に対する社会的受容の変化を研究する。また、象形文化アーカイヴのデータをどのような画質で蓄積・公開するかの研究と同時に、銀塩フィルムとデジタル画像の質的検討を現地で行った。

F. Mazois, *Les ruines de Pompei, vols.4, Paris 1783-1826* および *Antichità di Ercolano, vols.4, Napoli 1754-63* のデジタル化を行い、現在は失われた壁画や住宅がどのような状況にあったのか、また現存する出土品や遺構の場合、どのような経年変化を起しているのかを研究した。その成果は 2003 年開催予定の国際研究集会で発表の予定である。なおピラネージ、マゾワはインターネット上で公開しており、海外研究機関（ローマ大学、ナポリ大学、ドイツ考古学研究所ローマ支部など）からリンクを貼る要請がきている。

2.5 ソンマ・ヴェスヴィアーナのローマ時代別荘に関する調査研究（青柳・松山）

2001年、ナポリ考古学監督局の発掘許可を得て、東京大学による総合学術プロジェクトが開始された。2006年までの6カ年計画で、調査の対象は、ソンマ・ヴェスヴィアーナ市内のスタルツァ・デッラ・レジーナと呼ばれる地区にある通称「アウグストゥスの別荘」である。

調査地は、ヴェスヴィオ火山の北斜面にそびえる外輪山ソンマのふもとに位置し、これまで幾度となく噴火の被害をこうむってきたところである。同様に被災地となったナポリ湾沿岸地域では、ポンペイのようにすでに18世紀前半から発掘調査が盛んに行われてきたのに対し、この一帯は、自然の変化や人間の活動がどうなっていたのかほとんど知られていない。

スタルツァ・デッラ・レジーナで最初の調査が行われたのは、1930年代になってからである。農作業の最中に偶然、大きな壁体の一部が発見され、この辺りに重要な建物が埋まっているのが明らかとなったためである。

1934-36年、南イタリア考古監督局総監アメデオ・マイウーリ指揮の下、考古学者マッテオ・デッラ・コルテによって発掘が行われ、壮大な建物の一部が発見され、高さ約9メートルにもおよぶ遺構が保存されていた。発掘者たちの見解によれば、建物は62年の地震による被害の復旧作業がまだ終わらないうちに「79年の噴火に伴う泥流」によって破壊されたのであるという。

出土した遺構の中でも最も壮観なのは、東西約12mにわたって発見された「アーチや角柱による列柱廊」である。列柱廊は、3つの壁龕によって装飾された煉瓦造りの壁と直角に交わっていた。それ以外にも、「円柱や大理石製の柱頭、モザイクの床、英雄のような姿をした人物の美しい彫像の断片、(中略)壁や格間天井の彩色されたストゥッコ」も発見されている。

当時の約70㎡という狭い調査範囲にもかかわらず、遺構の壮大さや、その建つ位置は、初代ローマ皇帝アウグストゥスが最後の日々を過ごしたノーラの邸宅であると特定するのに十分な要素であるとみなされた。ノーラの邸宅は、古代の記述に一度ならずあらわれる(スエトニウス『ローマ皇帝伝』、「アウグストゥス」98、「ティベリウス」40、タキトゥス『年代記』1.5、1.9、4.57)。

遺構は、調査を続けていく資金が滞ったため、1930年代末までそのままになっていた。その後、第二次世界大戦が始まり、結局、調査は再開されることなく、遺構は再び土中に埋もれてしまった。

2001年夏、地中レーダーなどによる予備調査が行われた後、2002年9～10月に本格的な発掘調査が開始された。発掘調査の範囲は南北10m×東西10mで、その大部分はデッラ・コルテによる調査範囲と一致する。かつての調査範囲を明確にし、以前に出土した遺構を再確認するのが初年度調査の主たる目的であった。

今回の調査で確認された重要な遺構は、1930年代の発掘でも報告されていた連続するアーチである。遺構は、床面から最高7.8mの高さまで保存されており、アーチの柱間は2.7m、アーチ起点までの高さは5.40mであった。支柱の角柱は、サイズが均等ではない灰色凝灰岩の切石を積み上げて造られており、その上には白石灰岩のコーニスが載る。東側は独立した角柱ではなく、壁体より突出した矩形の支柱(幅2.35m)になっているのに対し

し、西側は4本の角柱がまとまって1本の大きな支柱の役割を果たしている。それらの中で完全に保存されていたのは、南側に位置する1対の角柱のみであった。アーチの部分はコンクリート造りのオプス・カエメンティキウムによって構築されているが、おそらく壁体の外側は煉瓦造りになっており、表面は漆喰仕上げになっていたと推定され、事実、内輪面には彩色ストウッコ装飾の一部が確認された。1930年代の調査範囲は今回の調査よりも西に広がっていたため、他の角柱グループの基部も出土した。したがって、遺構が西側にさらに続いているのは明らかである。今回の調査ではその地点まで及ばなかったとはいえ、前述のアーチに続く西隣のアーチの外輪の一部を発見するに至った。これまでの調査では発見されなかったものであり、その上、彩色されたストウッコによる装飾の一部も保存されていたのである。

角柱による列柱と直交して、煉瓦の層と黄色凝灰岩の小さな切石による層を交互に並べたオプス・リスタトゥムによって構築された壁体がある。壁には、破風のついた矩形の壁龕と、頂部が半円アーチになった半円形の壁龕とが交互に設けられている。また、壁は一面に漆喰が塗られ、彩色されていたらしく、その痕跡がわずかながら認められる。

遺構の床面は、地表より約7m下に位置しており、粉碎した陶片などを混ぜた防水性のモルタルであるコッチョペストによって仕上げられている。この仕上げは、床面から立ち上がって、角柱の基部やオプス・リスタトゥムの壁の下部も縁取っている。

調査範囲は狭かったものの、出土した遺構は広大な別荘の入口であったと推定される。現時点では、この遺構がアウグストゥスの別荘であるという従来の仮説を裏付けることも、また否定することもできない。とはいえ、建物が壮麗で、建築的にも質が高い点は注目すべきであり、かなり高名な人物によって建てられたといえる。また、この構築法は帝政初期の典型であり、従来の仮説に異議を唱えるものではない。

今後の2003-2004年における調査では、範囲を北および西に拡大していく予定であり、重要かつ新たな成果が見込まれている。この興味の尽きない建物がどこまで広がっているのか、どのようなプランをしているのか、また、ことにどのような機能を果たしていたのかについて、しだいに明確にされていくであろう。

さらに、考古学および火山学などの研究者が共同して行う発掘調査によって、噴火がどのように起こり、その結果どのように環境が変化していったのかも明らかになっていくと思われる。調査地は、火山地質学の分野でもあまり研究が進んでいなかった場所でもあり、この調査によって、より広範囲な領域の研究にとって、ひとつの参考資料として価値のあるものを提示できるはずである。

VI 研究成果

1. 研究室紀要

本研究部門を中心に進められた研究の成果を公表するために、『文化交流研究施設研究紀要』を刊行している。

第1号 (1975年)

発刊の辞		井上光貞
事業報告	設立の沿革 組織と人員 研究事業 その他の事業	
寄稿	文化交流研究施設が発足した頃 文化交流研究懇談会の意義	山本達郎 中村 元
研究報告	敦煌絵画の編年資料 敦煌チベット文語の解釈について メガログラフィアの図像と構図	秋山光和 山口瑞鳳 青柳正規

第2・3号 (1978年)

牢度叉闍聖変白描粉本 (Pelliot Tibétain 1923) と敦煌壁画	秋山光和
七世紀前半の吐蕃とネパールの関係	山口瑞鳳
vestibulum と fauces — ポンペイの住宅を中心に—	青柳正規
蘭学と国語学	松村 明
スウェーデンにおける日本学—その歴史と現状—	趙 承福
文化交流研究懇談会発表題目・発表者 (事業報告)	

第4号 (1980年)

先史時代旧世界における東と西 (比較考古学事始め)	渡辺 仁
沙州漢人による吐蕃二軍団の成立と mKhar tsan 軍団の位置	山口瑞鳳
切子坏とマンダラ	定方 晟
『プトゥン仏教史』目録部索引 I	西岡祖秀
敦煌チベット語禅文献目録初稿	木村隆徳

第5号 (1981年)

漢人及び通類人による沙州吐蕃軍団編成の時期	山口瑞鳳
敦煌禅籍 (漢文) 研究概史	田中良昭
『プトゥン仏教史』目録部索引 II	西岡祖秀

第6号 (1983年)

- 美学の新しい課題の中から 今道友信
イスラムの偶因論－ガザーリーの場合－ 中村廣治郎
接続助辞《dang》と《na》の用法の変遷－チベット語文典の不備－ 山口瑞鳳
『プトゥン仏教史』目録部索引Ⅲ 西岡祖秀

第7号 (1985年)

- 「La 義七字」の用法分類と de nyid の解釈－チベット語文典の不備(Ⅱ)－ 山口瑞鳳
敦煌写本に見られる道観について 金岡照光
慈寧宮宝相楼のブロンズ像立体曼荼羅の解析 田中公明

第8号 (1998年)

- アグリジェント近郊ローマ帝政期別荘の浴場施設 青柳正規

第9号 (1993年)

- カッツァネッロ (タルクィニア) のローマ遺跡発掘調査 中間報告 青柳正規・松山聡編

第10号 (1994年)

- カッツァネッロ (タルクィニア) のローマ遺跡発掘調査 (第2次) 中間報告
青柳正規・松山聡編

第11号 (1995年)

- Masanori Aoyagi・Satoshi Matsuyama
Preliminary Report of the Excavation 1994 of Roman Villa at Cazzanello(Tarquinoa)

第12・13号 (1997年)

- Masanori Aoyagi・Satoshi Matsuyama
Preliminary Report of the Excavation 1995,1996 of Roman villa at Cazzanello(Tarquinoa)

第14号 (1998年)

- Masanori Aoyagi・Satoshi Matsuyama
Preliminary Report of the Excavation 1997 of Roman Villa at Cazzanello(Tarquinoa)

第15号 (1999年)

- Masanori Aoyagi・Satoshi Matsuyama
Preliminary Report of the Excavation 1997 of Roman Villa at Cazzanello(Tarquinoa)

2. 歴代教官の主な研究成果

2.1 吉田精一

著書（発行年次順）

- 1) 『近代日本浪漫主義研究』 1940年7月 武蔵野書院
- 2) 『明治大正文学史』 1941年3月 修文館
→『近代日本文学史—明治大正篇—』と改題 1957年4月 山田書院
→原題、1960年7月 角川文庫
- 3) 『芥川龍之介』 1942年2月 三省堂
→『芥川龍之介の生涯と芸術』と改題 1951年11月 河出市民文庫
→原題、1957年1月 新潮女庫
- 4) 『古典と教養』 1943年12月 郁文社
- 5) 『日本文芸学論攷』 1945年6月 目黒書店
- 6) 『日本近代詩鑑賞 明治篇』 1937年7月
『同 大正篇』 1946年10月、『同 昭和篇』 1948年5月、『同 現代篇』 1951年12月 天明社
→1953年6月～1954年2月 新潮文庫(三冊)
- 8) 『新日本文学史序説』 1947年8月 巖松堂
- 9) 『永井荷風』 1947年12月 八雲書店
- 10) 『日本抒情詩の鑑賞』 1949年2月 宝文館
- 11) 『近代詩』(日本文学教養講座Ⅲ) 1950年10月 至文堂
- 12) 『日本文学新史』 1951年4月 不昧堂書店
- 13) 『近代日本文学入門』 1952年2月 要書房
- 14) 『日本近代詩入門』 1953年6月 要書房
- 15) 『現代詩』 1953年6月 学燈社
- 16) 『藤村名詩鑑賞』 1954年10月 河出書房→1961年6月角川文庫
- 17) 『現代評論年表』 1955年8月 河出書房
- 18) 『自然主義の研究』上・下 1955年11月、1958年1月 東京堂
- 19) 『夏目漱石』(少年少女新伝記文庫21) 1955年12月 金子書房
- 20) 『近代詩読本』 1956年1月 筑摩書房
- 21) 『初歩日本文学史—風土と歴史の流れに生きる—』 1960年9月 光文社
- 22) 『随筆入門』 1961年9月 河出書房→1965年2月 新潮文庫
- 23) 『現代文学と古典』 1961年10月 至文堂
- 24) 『鑑賞現代詩 1 (明治篇)』 1961年11月 筑摩書房→『鑑賞現代詩(明治篇)』と改題 昭 1966年10月 筑摩書房
- 25) 『日本近代文学』(大学講座) 1962年2月 日本女性文化協会
- 26) 『鑑賞と批評』 1962年5月 至文堂
- 27) 『現代日本文学史』 1963年5月 筑摩書房
- 28) 『源氏物語の旅』 1964年2月 人物往来社

- 29) 『文学入門』 1966年3月 旺文社
- 30) 『市民の文学』1・2 1966年8月、1967年11月 至文堂
- 31) 『古典文学入門』 1968年5月 新潮社
- 32) 『源氏物語の世界』 1969年10月 秋田書店
- 33) 『浪漫主義の研究』 1970年8月 東京堂
- 34) 『近代文芸評論史』明治篇、大正篇、 1975年3月、1980年12月 至文堂
- 35) 『吉田精一著作集』全27巻 1979年11月～1981年11月 桜楓社

共編著（発行年次順）

- 1) 『屋望・現代日本文学』 1941年3月 修文館
- 2) 『現代日本女学論—建設と展望』（平野謙） 1947年9月 真光社
- 3) 『近代叙情詩選花さうび』（佐藤春夫・島田謹二） 1947年2月 天明社
- 4) 『鑑賞宮沢賢治選集』 1949年5月 天明社
- 5) 『私たちの詩集』 1950年7月 筑摩書房
- 6) 『藤村名詩鑑賞』（島田謹二） 1951年5月 天明社
- 7) 『レポートの書き方』（学生教養新書、黒川純一・沼野井春雄） 1952年2月 至文堂
- 8) 『堀口大学詩集』 1952年10月 新潮社
- 9) 『近代日本叙情詩集』（佐藤春夫） 1953年10月 中央公論社
- 10) 『現代文学論大系』全八巻（青野季吉・伊藤整・中島健蔵・中野重治・中野好夫・中村光央） 1953年11月～1955年8月 河出書房
- 11) 『谷崎潤一郎の文学』（風巻景次郎） 1954年5月 塙書房
- 12) 『近代日本文学辞典』（久松潜一） 1954年5月 東京堂
- 13) 『青春の書簡』 1955年3月 河出書房
- 14) 『芥川龍之介文学読本』 1955年3月 要書房
- 15) 『日本の近代文学』（本間久雄・神西清） 1955年7月 東京堂
- 16) 『日本文学作品人名辞典』（市古貞次・三谷栄一） 1956年10月 河出書房
- 17) 『樋口一葉研究』 1956年10月 新潮社
- 18) 『日本文学史』（武田祐吉・久松潜一） 1957年2月 角川書店
- 19) 『近代日本文学史論』（成瀬正勝） 1958年4月 矢島書房
- 20) 『芥川龍之介研究』（芥川龍之介全集別巻） 1958年6月 筑摩書房
- 21) 『芥川龍之介』（近代文学鑑賞講座11） 1958年6月 角川書店
- 22) 『現代日本文学年表』（現代日本文学全集別巻1） 1958年9月 筑摩書房
- 23) 『昭和文学史』 1959年3月 至文堂
- 24) 『谷崎潤一郎』（近代文学鑑賞講座9） 1959年10月 角川書店
- 25) 『近代名作モデル事典』 1960年1月 至文堂
- 26) 『森鷗外研究』（鷗外全集別巻） 1960年3月 筑摩書房
- 27) 『藤村・花袋』（国語国文学研究史大成13、石丸久・岩永胖） 1960年4月 三省堂
- 28) 『近代文学入門』（近代文学鑑賞講座25、伊藤整・河盛好蔵） 1960年5月 角川書店
- 29) 『日本文学鑑賞辞典 近代篇』 1960年6月 東京堂

- 30) 『日本文学鑑賞辞典 古典篇』 1960年12月 東京堂
- 31) 『文学入門』(高橋健二) 1961年8月 小峰書店
- 32) 『漱石案内』(漱石全集別巻) 1961年8月 角川書店
- 33) 『鑑賞と研究現代日本文学講座』(稲垣達郎・伊藤整・勝本清一郎・成瀬正勝) 1961年5月～1963年4月 三省堂
- 34) 『現代日本文学』 1962年9月 有信堂
- 35) 『文芸読本西鶴』 1962年12月 河出書房新社
- 36) 『現代短歌の源流—座談会形式による近代短歌史—』(勝本清一郎・木俣修) 1963年6月 短歌研究社
- 37) 『芥川龍之介』(近代作家研究アルバム、葛巻義敏) 1964年6月 筑摩書房
- 38) 『森鷗外』(近代作家研究アルバム、野田宇太郎) 1964年10月 筑摩書房
- 39) 『日本詩歌風土記』上・下 1965年1年2月 社会思想社
- 40) 『史跡の旅』 1965年2月 人物往来社
- 41) 『愛と苦悩の手紙』 1965年6月 雪華社
- 42) 『夏目漱石』(近代文学注釈大系) 1965年7月 有精堂
- 43) 『史跡を行く』 1965年12月 人物往来社
- 44) 『現代短歌評釈』(本林勝夫・岩城之徳) 1966年2月 学燈社
- 45) 『近代文学』(村松定孝・安川定男) 1966年4月 東出版
- 46) 『近代文学名作事典』(関良一・岩城之徳・小田切進・三好行雄) 1967年2月 学燈社
- 47) 『現代俳句評釈』(楠本憲吉) 1967年2月 学燈社
- 48) 『日本文学入門』(森本治吉) 1967年3月 小峰書店
- 49) 『芥川龍之介』(写真作家伝叢書、芥川比呂志) 1967年3月 明治書院
- 50) 『夏目漱石必携』 1967年4月 学燈社
- 51) 『与謝野晶子』(日本詩人全集) 1967年9月 新潮社
- 52) 『新潮日本文学小辞典』(伊藤整・川端康成・瀬沼茂樹・中村光夫・久松潜一・平野謙・山本健吉) 1968年1月 新潮社
- 53) 『現代詩評釈』(分銅惇作・大岡信) 1968年3月 学燈社
- 54) 『日本文学概説』 1968年3月 有精堂
- 55) 『日本名歌の旅』(大西邦彦文・写真) 1968年6月 人物往来社
- 56) 『日本の詩集』全12巻 1968年7月～1969年1月 角川書店
- 57) 『現代詩の鑑賞』全5巻(読解講座、伊藤整・分銅惇作・小海永二) 1968年5月～9月 明治書院
- 58) 『現代日本文学の世界』 1968年12月 小峰書店
- 59) 『日本女流文学史(近世近代編)』 1969年3月 同文書院
- 60) 『近代詩鑑賞辞典』(分銅惇作) 1969年9月 東京堂
- 61) 『芥川龍之介』(日本近代文学大系38) 1970年2月 角川書店
- 62) 『日本近代文学の比較文学的研究』 1971年4月 清水弘文堂
- 63) 『近代作家の情炎誌』 1971年5月 至文堂
- 64) 『近代文学評論大系』I(明治篇、浅井清) 1971年10月 角川書店

- 65) 『日本国語大辞典』(林大・金田一春彦他) 1972年2月～1973年3月 小学館
- 66) 『高村光太郎の人間と芸術』 1972年6月 教育出版センター
- 67) 『比較文学』(武田勝彦・佐渡谷重信) 1972年6月 潮文社
- 68) 『芥川龍之介—海外の評価』(武田勝彦・鶴田欣也) 1972年6月 早稲田大学出版部
- 69) 『夏目漱石全集』別巻 1973年1月 筑摩書房
- 70) 『近代文学評論年表』(近代文学評論大系、第10巻) 1975年1月 角川書店
- 71) 『俳風柳多留拾遺輪講』(浜田義一郎) 1977年8月 岩波書店

2.2 秋山光和

著書(発行年次順)

- 1) 『光学的方法による古美術品の研究』 吉川弘文館 1955年3月
- 2) *La Peinture Japonaise*, Genève, 1961, Editions d'Art Albert Skira
- 3) 『平安時代世俗画の研究』 吉川弘文館 1964年3月
- 4) 『絵巻物』 小学館 1968年8月
- 5) 『王朝絵画の誕生』 中央公論社 1968年10月
- 6) 『源氏物語絵巻』 平凡社 1974年12月
- 7) 『絵巻物』 小学館 1975年2月
- 8) 『玉虫厨子・橘夫人厨子』 岩波書店 1975年3月
- 9) 『源氏絵』 至文堂 1976年4月
- 10) 『釈迦霊鷲山説法図(法華堂根本曼陀羅)』 学習研究社 1978年5月
- 11) 『隆房卿艶詞絵巻』 日本古典文学会 1978年11月

共編著(発行年次順)

- 1) 『栄山寺八角堂』(共著) 東京国立博物館 1950年8月
- 2) 『栄山寺八角堂の研究』(共著) 便利堂 1951年8月
- 3) 『信貴山縁起絵巻』(共著) 東大出版会 1957年6月
- 4) 『源氏物語絵巻』(日本絵巻物全集1)(編著) 角川書店 1958年6月
- 5) 『高雄曼荼羅』(共著) 吉川弘文館 1967年3月
- 6) 『ギメ東洋美術館』(共著) 講談社 1968年3月
- 7) *Arts of China (I): Neolithic Culture to the T'ang Dynasty* (共著), Tokyo, 1968, Kodansha International Ltd.,
- 8) *Arts of China (II): Buddhist Cave Temples* (共著), Tokyo, 1969, Kodansha International Ltd.,
- 9) 『扇面法華経』(共著) 鹿島出版会 1972年5月
- 10) 『中国美術—絵画I』(共著) 講談社 1973年10月
- 11) 『高松塚古墳壁画調査報告書』(共著) 高松塚古墳総合学術調査会編・便利堂発行
1974年12月
- 12) 『日野原家本紫式部日記絵巻』(編著) 日本古典文学会 1975年7月

論文（発行年次順）

- 1) 「大嘗会屏風について」『美術研究』118 1941年10月
- 2) 「山水屏風(神護寺蔵)」『美術研究』118 1941年10月
- 3) “First Epoch of European Style Painting in Japan,” *Bulletin of Eastern Art*, No.18 (1941)
- 4) 「平安時代の「唐絵」と「やまと絵」上・下」『美術研究』120・121 1941～1942年
- 5) 「平等院鳳凰堂の仏後壁画に就いて」『美術研究』144 1947年10月
- 6) 「宇治上神社本殿扉絵」『美術研究』159 1951年2月
- 7) 「光学的方法による美術品の鑑識 前言」『美術研究』159 1951年2月
- 8) “Origine de la Peinture Profane au Japon,” *Bulletin Museum van Aziatische Kunst*, No.34 (1951)
- 9) 「パルミユラ, ドウーラ・エウロポス, バアルベク, ペトラの美術」『世界美術全集3 古代西アジア』平凡社 1952年8月
- 10) 「平治物語六波羅合戦巻について」『大和文華』7 1952年9月
- 11) 「光学的方法による絵画の研究—ヨーロッパにおける研究の現状と東洋絵画への適用—」『美術研究』168 1953年2月
- 12) 「絵因果経, 紫式部日記絵巻, 金棺出現図のX線による鑑識」『美術研究』168 1953年2月
- 13) 「平安時代風景画の形成—鳳凰堂扉絵を中心に—」『ミュージアム』29 1953年8月
- 14) 「ペリオ調査団の中央アジア旅程とその考古学的成果(上・下)」『仏教芸術』19・20 1953年10～12月
- 15) 「鳳凰堂色紙形筆者兼行説の根拠に対する一批判」『美術史』10 1953年11月
- 16) 「巖島神社所蔵小形絵扇について」『美術研究』172 1953年12月
- 17) 「源氏物語絵巻についての新知見」『美術研究』174 1954年3月
- 18) 「松江市八重垣神社の壁画神像」『ミュージアム』42 1954年9月
- 19) 「光学的方法による美術品の鑑識に関する研究」『学術月報』6の11 1954年11月
- 20) 「教王護国寺所蔵唐櫃とその絵画」『美術研究』179 1955年1月
- 21) 「鳳凰堂本尊胎内納置の阿弥陀大小呪月輪及び蓮台の構造と彩色文様」『美術研究』182 1955年7月
- 22) 「信貴山縁起絵巻の様式的系譜」『仏教芸術』28 1956年6月
- 23) 「敦煌本降魔変(牢度叉闍聖変) 画卷について」『美術研究』187 1956年7月
- 24) 「紫式部日記絵巻解説」『国華』774 1956年9月
- 25) 「敦煌千仏洞—壁画とその歴史—」『三彩』79 1956年9月
- 26) 「ペリオ将来のスバン出土木製舍利容器三種」『美術研究』191 1957年3月
- 27) 「光学的方法による鳳凰堂本尊・壁扉画等の調査」『日本文化財』23 1957年3月
- 28) 「醍醐寺五重塔壁画の様式と技法について」『美術研究』196 1958年1月
- 29) 「岡寺本尊光背の板絵飛天について」『美術史』27 1958年1月
- 30) “Formation du Style National dans l’Arts Japonais,” *L’Information d’Histoire d’Art*, 1958-5 (1958)
- 31) 「鳥毛立女図の姉妹たち—樹下美人図の系譜—」『ミュージアム』104 1959年11月
- 32) “Le Rinceau de Vigne dans l’Art Japonais Ancien,” *International Symposium on History of*

Eastern and Western Cultural Contacts, Unesco (1959)

- 33) 「源氏物語絵巻の特質」『大和文華』32 1960年1月
- 34) 「平安時代の「すみがき」について」『美術研究』208 1960年1月
- 35) 「地獄草紙, 餓鬼草紙, 病草紙の絵画」『日本絵巻物全集VI 地獄草紙, 餓鬼草紙, 病草紙』1960年3月 角川書店
- 36) 「敦煌における変文と絵画—再び牢度叉闍聖変(降魔変)を中心に—」『美術研究』211 1960年7月
- 37) 「ミーラーン第五古址回廊北側壁画」『美術研究』212 1960年9月
- 38) 「長安の唐墓壁画」『三彩』135 1961年2月
- 39) 「「隆房卿艶詞絵をめぐる」—いわゆる「藤波絵草紙」の出典とその性格—」『美術研究』215 1961年3月
- 40) 「日本上代絵画における紫色とその顔料」『美術研究』220 1962年1月
- 41) 「鳥海氏蔵法華経普門品見返し絵について」『美術研究』224 1962年9月
- 42) “Les Rouleaux enluminés (emaki) au Japon médiéval,” *France-Asie*, No.172 (1962)
- 43) 「白描絵入源氏物語, 浮舟・蜻蛉の巻について」『美術研究』227 1963年3月
- 44) 「弥勒下生経変白描粉本と敦煌壁画の製作」『西域文化研究』VI 法蔵館 1963年3月
- 45) 「墳墓装飾の絵画」『世界美術大系8 中国美術I』講談社 1963年12月
- 46) “Nocturnal Attack on the Palace of Sanjo, Man through His Art,” *War and Peace*, Paris, Unesco (1963)
- 47) 「敦煌千仏洞」『世界美術大系9 中国美術II』講談社 1964年5月
- 48) 「敦煌画「虎をつれた行脚僧」をめぐる考察—ペリオ将来絹絵二遺例の紹介を中心に—」『美術研究』238 1966年2月
- 49) 「病草紙(不眠の女)」『美術研究』239 1966年3月
- 50) 「敦煌画阿弥陀浄土図」『美術研究』252 1968年3月
- 51) 「正倉院絵画作品解説(共著)」『正倉院の絵画』1968年7月
- 52) 「唐代の敦煌壁画—フォッグ美術館所蔵の断片を中心に—」『仏教芸術』71 1969年7月
- 53) 「中国の石窟寺」『世界の文化史蹟7』講談社 1969年12月
- 54) 「源氏物語の絵画論」『源氏物語講座五』有精堂 1971年9月
- 55) “New Buddhist Sects and Emakimono (handscroll painting) in the Kamakura period,” *Acta Asiatica*, No.20 (1971)
- 56) 「高松塚古墳の壁画」『高松塚古墳と飛鳥』中央公論社 1972年9月
- 57) 「平治物語絵巻三条殿夜討の巻について」『仏教芸術』90 1973年2月
- 58) 「慈尊院弥勒仏像台座蓮弁の装飾文様」『美術研究』283 1973年3月
- 59) 「敦煌・中央アジアの絵画」『中国美術—絵画I』講談社 1973年10月
- 60) 「「鳥獣戯画」甲巻の残欠二種—新出本と益田家旧蔵本—」『美術研究』292 1974年3月
- 61) 「ペリオ収集敦煌写本の絵画資料」『仏教芸術』96 1974年5月
- 62) 「敦煌壁画研究の新資料—James Lo氏撮影写真とフォッグ, エルミターージュ両美術館

- 所蔵断片の検討―』『仏教芸術』100 1975年2月
- 63) 「天稚彦草紙絵巻をめぐる諸問題」『国華』985 1975年12月
 - 64) 「敦煌絵画編年資料(一)」『東京大学文学部文化交流研究施設紀要』1 1976年3月
 - 65) 「高松塚古墳壁画に関する二三の新知見」『月刊文化財』1976年7月
 - 66) 「白描絵入本「源氏物語」(早蕨)の詞書断簡」『美術研究』305 1977年3月
 - 67) 「源氏絵の系譜」『図説日本の古典7 源氏物語』集英社 1978年2月
 - 68) 「牟婁又闕聖変白描粉本(Pelliot Tibetan 1293)と敦煌壁画」『東京大学文学部文化交流研究施設研究紀要』2・3 1978年3月
 - 69) 「「源氏物語絵巻」若紫図断簡の原形確認」『国華』1011 1978年5月
 - 70) 「院政期における女房の絵画製作」1979年6月『古代・中世の社会と思想』家永三郎教授退官記念論集(三省堂)
 - 71) “Sur l’Esthétique de la Cour A l’Epoque de Heian (IX-XIIe Siècles) et Sa Continuité dans l’Art Japonais,” *Les Etudes Japonaises en France (Colloque)* (1979)
 - 72) “Using Scientific Analysis in the Art Historical Study of old Japanese Paintings,” *International Symposium on Conservation of Cultural Property -Cultural Property and Analytical Chemistry.*, Tokyo (1979)

2.3 山口瑞鳳

著書(発行年次順)

- 1) 『チベット語文語法教科書』ユネスコ東アジア・センター、1969年
- 2) 『吐蕃王国成立史研究』岩波書店、1983年
- 3) 『チベット』上 東京大学出版会、1987年
- 4) 『チベット』下 東京大学出版会、1988年

編纂・翻訳(発行年次順)

- 1) *Catalogue of the Toyo Bunko collection of Tibetan works on history*, 東洋文庫、1970年
- 2) *Sum cu pa dang rtags kyi 'jug pa, Studia TibeticaII*, 東洋文庫、1973年
- 3) 『スタイン蒐集(敦煌)チベット語文献解題目録』12分冊 東洋文庫、1977年～1988年
- 4) 『スタイン蒐集チベット語文献解題目録』索引 東洋文庫、1984年
- 5) R. A. スタン『チベットの文化』岩波書店、共訳者定方晟、1971年
- 6) 同(決定版) 岩波書店、共訳者定方晟、1993年

論文(発行年次順)

- 1) 「訳梵蔵文文法論」東京大学文学部卒業論文、未刊300×524、1953年
- 2) 「訳梵蔵文における自動詞文の研究」『大倉山学院紀要』1、1954年
- 3) “On the Tibetan syntaxes,”『大倉山学院紀要』2、1956年
- 4) 「チベット語接続辞teについて」『東洋学報』39-4、1957
- 5) 「願実汗のチベット支配に至る経緯」『岩井大慧博士古稀記念転籍論集』、1963年

- 6) 「古代チベット史考異」上『東洋学報』49-3、1966年
- 7) 「古代チベット史考異」下『東洋学報』49-4、1967年
- 8) 「チベットの仏教」講座東洋思想5『仏教思想』I、東大出版会、1967年
- 9) 「吐蕃—伝承と制度からみた性格」『歴史教育』15-9/10、1967年
- 10) 「チベット文化の背景」『チベットの秘宝展』、1967年
- 11) 「チベット・シッキム・ブータンの仏教」『仏教大年鑑』、1968年
- 12) 「蘇毘の領界」『東洋学報』50-4、1968年
- 13) 「ダライ・ラマ」『現代宗教思想のエッセンス』、ぺりかん社、1969年
- 14) 「自蘭と Sum pa の rLangs 氏」『東洋学報』52-1、1969年
- 15) “Matrimonial relationship between the T‘u-fan and T‘ang Dynasties, I,” *Memoirs of the Toyo Bunko*, 27 (1969)
- 16) “Matrimonial relationship between the T‘u-fan and T‘ang Dynasties, II,” *Memoirs of the Toyo Bunko*, 28 (1970)
- 17) “rTsang-yul and Yan-lag gsum-pa‘i ru,” *Acta Asiatica*, 19 (1970)
- 18) 「東女国と自蘭」『東洋学報』54-3、1971年
- 19) 「吐蕃の国号」『日本西藏学会会報』18、1972年
- 20) 「吐蕃王家の祖先」『駒沢大学仏教学部研究紀要』31、1973年
- 21) 「女国の部族名 d Mu」『日本西藏学会会報』19、1973年
- 22) 「チベット仏教と新羅の金和尚」『新羅仏教研究』、1973年
- 23) 「瘦悉董摩と sPu de gung rgyal」『中付元博士還暦記念論集』、1973年
- 24) 「チベット仏教」『ブリタニカ国際大百科事典』12、1974年
- 25) 「チベットの暦学」『鈴木学術財団研究年報』10、1974年
- 26) 「ring lugs rBa dPal dbyangs」『平川彰博士還暦記念論集』、1975年
- 27) 「敦煌チベット文語の解釈について」『東大文学部文化交流研究施設紀要』1、1975年
- 28) “The geographical location of Sum-yul,” *Acta Asiatica*, 20 (1975)
- 29) 「『三十頌』『性人法』の成立時期をめぐって」『東洋学報』57-1/2、1976年
- 30) 「「吐蕃」の国号と「羊同」の位置」『東洋学報』58-3/4、1977年
- 31) 「活仏について」『玉城康四郎博士還暦記念論集』、1977年
- 32) “On the Annals relating to Princess Wen-Ch‘eng,” *Memoirs of the Toyo Bunko*, 35 (1977)
- 33) 「吐蕃王国仏教史年代考」『成田山仏教研究所研究紀要』3、1978年
- 34) 「『諸王統史明示鏡』の著者と成立年」『東洋学報』60-1/2、1978年
- 35) 「『十六条清浄人法』の虚構と吐蕃の刑法」『隋唐帝国と東アジア世界』、1979年
- 36) 「七世紀前半の吐蕃とネパールの関係」『東大文学部文化交流研究施設紀要』2、1979年
- 37) 「『二卷本訳語积序』の研究」『成田山仏教研究所研究紀要』4、1979年
- 38) 「吐蕃王国の成立と法令・制度」『中国律令制とその展開』、1979年
- 39) 「ダルマ王の破仏とその殺害者」『勝又俊教博士古稀記念論集』、1980年
- 40) 「ダルマ王殺害の前後」『成田山仏教研究所研究紀要』5、1980年
- 41) 「ダルマ王の二子と吐蕃の分裂」『駒沢大学仏教学部論集』11、1980年
- 42) 「吐蕃支配時代」講座敦煌2『敦煌の歴史』大東出版社、1980年

- 43) 「中国禅とチベット仏教一摩訶衍の禅」 講座敦煌 8『敦煌仏教と禅』 大東出版社、1980年
- 44) 「ラダックの仏教と歴史」『秘境ラダック』 成田山新勝寺、1980年
- 45) “Localisatio de rTsang-yul,” *Acta Orient. Ilung*, 34 (1980)
- 46) 「沙州漢人による吐蕃二軍団の成立と mKhar tsan 軍団の位置」『東大文学部文化交流研究施設紀要』 4、1981年
- 47) 「チベットとチベット学について」『チベット文化研究会報』 1981-7、1981年
- 48) 「チョナンパの如来蔵説とその批判説」『田村芳朗博士還暦記念論集』、1982年
- 49) 「チベット史料の年次計算法」『東洋学報』 63-3/4、1982年
- 50) 「漢人及び通頼人による沙州吐蕃軍団編成の時期」『東大文学部文化交流研究施設紀要』 5、1982年
- 51) 「チベット仏教史略説」『東洋学術研究』 21-2、1982年
- 52) 「カダム派の典籍と教義」『東洋学術研究』 21-2、1982年
- 53) 「チベット仏教典籍解題」『成田山仏教研究所研究紀要』 7、1982年
- 54) 「チベットの歴史」『西藏—ラマの世界』 毎日コミュニケーションズ、1982年
- 55) 「チベットの歴史」『大チベット展』 毎日コミュニケーションズ、1983年
- 56) 「チベット (仏教)」玉城康四郎編『仏教史』Ⅱ 山川出版社、1983年
- 57) 「チベット学と仏教」『駒沢大学仏教学部論集』 15、1984年
- 58) 「接続辞 <dang> と <na> の用法の変遷」『東大文学部文化交流研究施設紀要』 6、1984年
- 59) 「虎を伴う第十八羅漢図の来歴」『神秘思想論集』 成田山新勝寺、1984年
- 60) “Methods of chronological calculation in Tibetan historical sources,” *Tibetan and Buddhist Studies, commemorating the 200th Anniversary of the Birth of A.Csoma de Koros*, Budapest (1984)
- 61) 「チベット史における漢文史料の誤伝」『東洋学報』 66-1/2/3/4、1985年
- 62) 「チベット仏教の特質」『チベット文化研究所会報』 9-2/3、1985年
- 63) 「キリスト教徒の見たチベット仏教」『国立教育会館通信』 246～250、1985年
- 64) 「十九世紀までのチベット旅行記」『思想の動き』 18、1985年
- 65) 「「La 義七字」の用法分類と de nyid の解釈」『東大文学部文化交流研究施設紀要』 7、1985年
- 66) 「『デンカルマ』 八二四年成立説」『成田山仏教研究所研究紀要』 9、1985年
- 67) 「rdzogs tshigs の働きと用法の変遷」『チベットの仏教と社会』 (山口瑞鳳編) 春秋社、1985年
- 68) 「チベット語文献—仏教関係以外の諸文献」講座敦煌 6、『敦煌胡語文献』 (山口瑞鳳編) 大鹿出版社、1985年
- 69) 「チベット学研究的意義」『チベットの仏教と社会』 (山口瑞鳳編) 春秋社、1985年
- 70) “On the author and the date of the rGyal-rabs mams-kyi ‘byung-tshulgsal-ba’i me-long,” *Proceeding of the International Conference on China Border Area Studies*, Tai-Pei (1985)
- 71) 「仏教学におけるチベット仏教研究の意義」『春秋』 279、1986年
- 72) 「チベットの歴史」『チベットの言語と文化』、1987年
- 73) 「インド仏教における方便」『東方』 3、1987年

- 74) 「助動詞 yin, yod と動詞 ‘dug – 訳経文を含む古代文献の用法」『高崎直道博士還暦記念論集』、1987 年
- 75) 「チベット (史)」『中央アジア史』(江上波夫編) 山川出版社、1987 年
- 76) 「シャーンタラクシタの中観」『仏教思想史論集』成田山新勝寺、1988 年
- 77) 「摂政サンギェーギャンツォの出自をめぐって」『榎一雄博士頌寿記念東洋史論集』、1988 年
- 78) 「飛んでいる矢は止まっているか」『思想』772 岩波書店、1988 年
- 79) 「チベット古派密教と性瑜伽」上・下『UP』190, 191 東大出版会、1988 年
- 80) 「チベット語の自己使役形」『藤田宏達博士産暦記念論集』、1989 年
- 81) 「チベット仏教から見た日本の仏教学」『東海仏教』34、1989 年
- 82) 「刹那滅と縁起生の相違 – わが国中観哲学の常識に問う」『思想』778、1989-11、岩波書店、1989 年、pp.55-69
- 83) 「二種類の「零」・「無」と「空」 – 10 進法を支えるいま一つの「零」」『思想』785、1989-11、岩波書店、1989 年、pp.87-98
- 84) 「中国のチベット仏教寺院」鎌田茂雄監修『中国』第三巻「仏土復興」毎日コミュニケーションズ、1989 年、pp.216-222
- 85) 「インド・チベットの仏教思想について」『通信』67、東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所、1989 年、pp.28 - 38 ; 68, pp.25-34
- 86) 「チベット仏教思想史」岩波講座「東洋思想」11『チベット仏教』岩波書店、1989 年、pp.22-115
- 87) “On the composition of the Sum-cu-pa and the rTags-kyi ‘jug-pa.,” *The Memoirs of the Toyo-Bunko*,47 (1989), pp.91-113
- 88) 「古代チベットにおける頓悟・漸悟論争」韓国・普照思想研究院『普照思想』4、仏日出版社、1990 年、pp.41-64
- 89) 「チベット系民族」『民族の世界史』4、護雅夫・岡田英弘『中央ユーラシアの世界』山川出版社、1990 年、pp.515-576
- 90) 「チベット暦置閏法定数の意味と歴史的閏月年表」『成田山仏教研究所紀要』13、1990 年、pp.1-48
- 91) 「生き仏国王の由来と選定」『文芸』冬号 河出書房新社、1990 年、pp.286-291
- 92) 「吐蕃王朝外戚支配機構「尚論」制の成立と意義」唐代史研究会報告第VII集『東アジア古文書の史的研究』唐代史研究会、1990 年、pp.447-478
- 93) “The grammatical function of de-nyid,” *Aita Orient.llung* ,XL-IV (1990) pp.251-257
- 94) 「日本に伝わらなかった中観哲学」『思想』802, 1991-4, 岩波書店、1991 年、pp.4-29
- 95) 「「無」と「空」の相違・二種類の「零」について」『莊峰金知見博士華甲記念師友録』莊峰金知見博士師友録刊行会、1991 年、pp.865-883
- 96) 「「縁起生」の復権 – 寂護による清弁・法称の刹那滅論批判 –」『成田山仏教研究所紀要』14、1991 年、pp.1-57
- 97) 「ボン教の成立と変遷」季刊『民族学』58、千里文化財団、1991 年、pp.85-89
- 98) 「大蔵経」ほか『世界文学大事典』綜合社、1991 年
- 99) 「三輪清浄の布施 – 一大乗仏教の目的は解脱でない」『成田山仏教研究所紀要』15、1992

年、pp.577-608

- 100)「ダライラマ五世の統治権一活仏シムカンゴンマと管領ノルブの抹殺」『東洋学報』73-3/4、1992年、pp.124-160)
- 101)“The significance of intercalary constants in the Tibetan calendar and hisyorical tables of intercalary months,” *Tibetan Studies, Proceeding of the 5th Seminar of the International Association of Tibetan Studies*, Narita 1989,1992
- 102) “The establishment and significance of the Zhang-long system of rule by maternal relations during the T’u-fan dynasty,” *The Memoirs of the Toyo-Bunko*,50 (1992), pp57-80
- 103)「十七世紀初頭のチベットの抗争と青海モンゴル」『東洋学報』74-1/2、1993年、pp.1-25
- 104)「十七世紀初頭の青海トゥメト部」『成田山仏教研究所紀要』16、1993年、pp.1-26
- 105)「古代ダゲ王国」説の欺瞞『東方』8、1993年、pp.59-74
- 106)「大乘仏教教理の由来一 小乗非仏説」『思想』828、1993-6、岩波書店、1993年、pp.61-87
- 107)『般若経』に如来蔵思想が説かれているか『宮坂宥勝先生古稀記念論集』法蔵館、1993年
- 108)“The conflict in early seventeenth century Tibet and the Köknor Mongols”,『成田山仏教研究所紀要』16、1993年、pp.27-48
- 109)“The fiction of King Dar-ma’s Persecution of Buddhism,”『M.Soymié 教授古稀記念論集』Paris, 1993

批評（発行年次順）

- 1) 上山大峻「曇曠と敦煌の仏教学」『東洋学報』47-4、1965年
- 2) 長沢和俊『チベット一極奥アジアの歴史と文化』『東洋学報』48-1、1965年
- 3) シェルクスマ「rtsod pa一チベットにおける僧院の論議」『東洋学報』48-2、1965年
- 4) E.G. スミス「『パンチェンラマー世自伝』解説その他」『東洋学報』53-3/4、1971年
- 5) A. マクドナルド「ペリオ・チベット文書の読解」『東洋学報』54-4、1972年
- 6) Z. アフマド『十七世紀における中国・チベット関係』（『東洋学報』55-4）、1973年
- 7) 「回顧と展望（チベット）」『史学雑誌』、1964年
- 8) 「回顧と展望（チベット）」『史学雑誌』、1965年
- 9) 「回顧と展望（チベット）」『史学雑誌』、1975年
- 10) 「回顧と展望（チベット）」『史学雑誌』、1976年
- 11) 佐藤長『チベット歴史地理研究』『史学雑誌』88-11、1979年
- 12) フランス国立図書館『国立図書館チベット語文献抄』『東洋学報』61-1、1979年
- 13) L. ペテック『ラダック王国』『東洋学報』62-1/2、1979年
- 14) 「チベットの实像に迫る - 『チベット曼荼羅の世界』を讀んで」『本の窓』89-6、1989年
- 15) 「チベットに仏典を求めた二人一村上護『風の馬』」『産経新聞』6月2日、1989年

3. 現任教官の研究成果

3.1 青柳正規

1. 概要

- 1) 古代ローマ時代の住宅建築 (domus, insula, villa) を、建築史の観点からだけでなく、美術史、考古学、文化史の観点から総合的に研究し、その歴史の変遷と地域的特質の解明を目指す。このため文献による研究とともに、発掘調査などの現地調査もあわせて行う。
- 2) ローマ絵画、とくにヴェスヴィオ山周辺地域の絵画資料におけるヘレニズム的要素とローマ的要素の分析解明を目指す。
- 3) 古代都市ローマの地誌学研究によって、都市の歴史の変遷および公共建築、宗教建築、公共基盤、都市行政、社会制度などの推移と整備の解明を目指す。
- 4) ヘレニズム文化を如何にローマ文化が受容したかに関して絵画、彫刻、建築を中心に考察し、ローマ文化におけるギリシア文化の役割の解明を目指す。
- 5) イタリア中部における大土地所有制のあり方について、経済史、社会史、文化史の各分野の総合的研究を目指す。
- 6) 古代ローマ文化に関する共時的研究のための画像データベースの構築を目指す。
- 7) 先史美術に関して、古典考古学の方法を用いての体系化を目指す。
- 8) 博物館の歴史の変遷の解明を目指す。

2. 主要業績

A. 著書 (単著)

- 1) 『エウローパの舟の家』東京大学文学部、1977、pp. 248 (1978、地中海学会賞)。
- 2) 『原史美術』(名宝日本の美術、第1巻)小学館、1982年、pp. 151。
- 3) 『古代都市ローマ』中央公論美術出版、1990年、pp. 469 (1991、マルコ・ポーロ賞、浜田清稜賞)
- 4) 『6世紀までの美術』(日本美術の流れ、第1巻)岩波書店、1991年、pp. 99。
- 5) 『皇帝たちの都ローマ』(中公新書)中央公論社、1992、pp. 401。(毎日出版文化賞)
- 6) 『トリマルキオの饗宴 ―逸楽と飽食のローマ文化』(中公新書)中央公論社、1997、pp.307。

B. 編著・共著・共訳

- 1) (共編著)『ローマ都市ポンペイ』日本テレビ放送網株式会社、1986年
- 2) (共編著)『ルーブルとパリの美術、ルーブル美術館1』小学館、1987年
- 3) (監修)『世界美術大事典』小学館、1987-90年
- 4) (共編著)『ポンペイ壁画』全2巻 岩波書店、1991年、第1巻 pp. 289 - 295、第2巻 pp. 17-83 (Pompejanische Malerei, Stuttgart-Zuelich 1990, Pittura di Pompei, Milano 1991 として翻訳出版)
- 5) (共編著)『世界美術大全集』小学館、1992 - 97年

- 6) (共編著) *La peinture de Pompéi; Témoignages de l'art romain dans la zone ensevelie par Vé suve en 79 ap. J.-C.*, vols. 2, Paris 1993
- 7) (共編著) 「カツツアネッコ (タルクィニア) のローマ遺跡発掘調査 中間報告」『東京大学文学部文化交流研究施設研究紀要』第9号 1993年
- 8) (共編著) 「カツツアネッコ (タルクィニア) のローマ遺跡発掘調査 (第2次) 中間報告」『東京大学文学部文化交流研究施設研究紀要』第10号 1994年
- 9) (共編著) “Preliminary Report of the Excavation 1994 of Roman Villa at Cazzanello(Tarquinia),” *Annual report of the institute for the study of cultural exchange*, vols.11, University of Tokyo 1995
- 10) (共編著) “Preliminary Report of the Excavation 1995,1996 of Roman Villa at Cazzanello (Tarquinia),” *Annual report of the institute for the study of cultural exchange*, vols.12,13, University of Tokyo 1997
- 11) (共編著) 『日本美術館』全6巻、小学館、1997年
- 12) (共編著) “Preliminary Report of the Excavation 1997 of Roman Villa at Cazzanello(Tarquinia),” *Annual report of the institute for the study of cultural exchange*, vols.14, University of Tokyo 1998
- 13) (共編著) *Le ville romane dell'Italia e del Mediterraneo antico*, Tokyo 1999
- 14) (監修) 『ポンペイの遺産』小学館、1999年
- 15) (共編著) 『西洋美術館』小学館、1999年
- 16) (共編著) “Preliminary Report of the Excavation 1998 of Roman Villa at Cazzanello(Tarquinia),” *Annual report of the institute for the study of cultural exchange*, vols.15, University of Tokyo 1999
- 17) (監修) 『岩波 世界の美術』既刊12巻、岩波書店、2000年～
- 18) (共編著) *Casa di Giulio Polibio -Giornale di Scavi 1966/1978*, Pompei 2001, pp. 307
- 19) (共編) *Casa di Giulio Polibio -Studi interdisciplinari*, Pompei 2001, pp. 215
- 20) (監修) 『アカデメイア』既刊大林 no.49、2002年、pp. 87

C. 論文

- 1) “Uno studio sul megalografico della Villa dei Misteri,” *Annuario dell'Istituto Giapponese di Cultura* ,7, 1969/70, pp. 55-86.
- 2) 「花綵を担ぐエロスの源流と伝播に関する一考察」『オリエント』15巻2号, 1973, pp. 55-86.
- 3) 「ローマ絵画」『ローマ美術』(体系世界の美術、第6巻)学研、1974, pp.164-197.
- 4) 「第Ⅱ様式装飾壁面とピナケス」『オリエント』18巻1号, 1975, pp. 1-15.
- 5) 「メガログラフィアの図像と構図ーディオニュソス秘儀図に関してー」『東京大学文化交流研究施設研究紀要』1, 1975, pp. 43-56.
- 6) 「ポンペイ壁画ー民衆画と神話画ー」『SPAZIO』13, 1976, pp. 104-120.
- 7) 「豎琴弾きアポローン」『美術史』101, 1976, pp. 68-73.
- 8) 「オプロンティス荘の第Ⅱ様式壁画」『江上波夫教授古希記念論集』オリエント学会、1976, pp. 417-432.
- 9) 「ソフィロス・モザイク」『オリエント』19巻2号, 1976, pp. 41-52.
- 10) 「神話的風景画の成立ーまたはギリシア神話画の衰退ー」『ユリイカ』1978年6月臨

- 時増刊、pp. 236-249.
- 11) 「vestibulum と fauces」『東京大学文化交流研究施設研究紀要』2/3, 1979, pp. 59-77.
 - 12) 「古典古代のアシア像」『仏教芸術』126, 1979, pp. 104-116.
 - 13) 「記念建造物」(共著)『地中海建築』I, 日本学術振興会、1979, pp. 158-167.
 - 14) 「トラヤヌス記念柱」『SPAZIO』23, 1980, p.97-137.
 - 15) 「ドゥルエッリ出土幾何学文モザイク」『芸術研究報』1, 1980, pp.81-102.
 - 16) 「形態の純化をめざしてーキクラデスの石偶についてー」『みずえ』906, 1980, pp. 35-42.
 - 17) 「コンスタンティヌス凱旋門」『SPAZIO』24, 1980, pp. 67-92.
 - 18) 「ローマ、都市生活の美術」『ローマとその世界帝国』新潮社、1980, pp. 81-96.
 - 19) 「ローマ肖像彫刻の写実主義」『芸術研究報』2, 1981, pp. 1-33.
 - 20) 「アウグストゥスの広場」『SPAZIO』25, 1981, pp. 107-130.
 - 21) 「ハドリアヌスの別荘」『逸楽と憂愁のローマ』六耀社、1981, pp. 129-178.
 - 22) “Ripresa degli scavi nella villa romana di Realmonte,” *Kokalos*, XXVI/XXVII, (1980/81), pp. 668-673.
 - 23) 『アグリジェント近郊ローマ帝政期別荘』(第1次「シチリアの古代美術・考古学調査」概報 I) 筑波大学芸術学系、1981, pp. 1-47.
 - 24) 「ポセイドーン・モザイクについて」『美術史』113, 1982, pp. 1-22. (“Il mosaico di Posidone rinvenuto a Realmonte,” *Quaderno dell'Univ. di Messina* ,3, (1988), pp. 91-103 として翻訳刊行)
 - 25) 「ローマ記念門における三角小間装飾の変遷」『芸術研究報』3, 1982/83, pp. 11-46.
 - 26) 「発掘調査の方法」『建築雑誌』97, 1982年11月, pp. 30-31.
 - 27) 「プリマ・ポルタ出土『アウグストゥス像』について」『地中海学研究』4, 1983, pp. 33-52.
 - 28) 『アグリジェント近郊ローマ帝政期別荘』(第2次「シチリアの古代美術・考古学調査」概報 II) 筑波大学芸術学系、1983, pp. 1-35.
 - 29) “Flying Victory -its Prototypes and Diffusion-,” *Taq-i-Bustan* ,IV, Tokyo 1984, pp. 167-177.
 - 30) 「エトルリア壁画と古代地中海世界の絵画」M. パロッティエーノ・青柳正規他著『エトルリアの壁画』(岩波書店)、1985, pp. 88-91. (“La pittura etrusca nell'ambito del Mediterraneo,” *Pittura etrusca*, Milano 1984, pp.86-90; “Die Stellung der etruskischen Malerei innerhalb der antiken mediterranen Malerei,” *Etruskische Wandmalerei*, Stuttgart-Zuelich 1985, 85-89; “Ancient Painting in the Mediterranean Basin,” *Etruscan Painting*, New York 1986, pp. 79-82 として翻訳刊行) .
 - 31) 『アグリジェント近郊ローマ帝政期別荘』(第3次「シチリアの古代美術・考古学調査」概報 III) 筑波大学芸術学系、1985, pp.1-35.
 - 32) 「スキュラ・モザイクについて」『美術史論叢』2、1986, pp.1-24.
 - 33) 「エトルリア美術とローマ美術」『ルーブルとパリの美術、第1巻』小学館、1987、pp. 447-548.
 - 34) 「ヘレニズム絵画における騎馬像」『美術史論叢』4号、1988, pp.1-23.
 - 35) 「アグリジェント近郊ローマ帝政期別荘の浴場施設」『文化交流研究紀要』10、1988、

pp. 1-43.

- 36) 「イタリアとシルクロード (Italy and Silk Road)」『シルクロード、オアシスと草原の道』奈良県立美術館、1988, pp. 170-174.
- 37) 「ローマ経済と絹の道」『言語』18巻1号、1989, pp. 76-82.
- 38) “Greek Art and Roman Art,” *Ancient Art: Greece, Etruria and Rome* (catalogue of the Exhibition at the National Museum of Antiquities at Leiden), Leiden 1989, pp. 14-17.
- 39) 「ファルネーゼの皿とプリマ・ポルタ出土アウグストゥス像について」『美術史論叢』5, 1989, pp. 1-22.
- 40) 「コンコルディア神殿 Aedes Concordiae inter Capitolium et Form (Fest. p.84L) —創建年代について—」『美術史論叢』4, 1990, pp. 1-22.
- 41) (共著) “Amphorae from a Crusader Ship Found off Tartos, Syria,” *Amphorae (Excavation of a Sunken Ship Found oof the Syrian Coast)* , Tokyo 1990, pp. 84-87.
- 42) 「原始美術と古代オリエント美術」『西洋美術史』美術出版社、1990, pp.3-20.
- 43) 「ギリシア美術とローマ美術」『西洋美術史』美術出版社、1990, pp.21-36.
- 44) 「コンコルディア神殿について」『古代イタリアの歴史考古学セミナー論集 I』(イタリア文化会館) 1991, pp. 35-42.
- 45) 「『ローマ 14 区総覧』注解」(共著)『美術史論叢』7, 1991, pp. 159-187.
- 46) 「古代ローマの権力と都市文化」『世界都市の条件』筑摩書房、1992, pp. 5-66.
- 47) 「コンスタンティヌス凱旋門」『古代イタリアの歴史考古学セミナー論集 II』(イタリア文化会館) 1992, pp. 84-87.
- 48) 「アウグストゥス時代のローマ —都市と田園を中心に—」『古代イタリアの歴史考古学セミナー論集 III』(イタリア文化会館) 1993, pp. 87--91.
- 49) 「情報化社会における博物館展示の可能性」『東アジアの形態世界』東京大学出版会、1994, 1994, pp. 5-8.
- 50) 「イタリア考古学事情」『最新海外考古学事情』ジャパン通信社、1994, pp. 33-38.
- 51) 「ギリシア・ローマ美術と仏教美術」(共著)『シルクロード学の提唱』シルクロード学研究センター編、1994, pp. 85-126.
- 52) 「先史文化の美術—縄文弥生時代を中心に—」『原始の造形』(日本美術全集、第1巻)講談社、1994, pp. 154-159.
- 53) 「ヨーロッパの古代墓室壁画」『装飾古墳が語るもの』国立歴史民俗博物館、1995, 61-71.
- 54) 「人類最古の美術—時間と空間への挑戦」『先史美術と中南米美術』(世界美術大全集、第1巻)小学館、1995, pp. 9-16.
- 55) 「ヘレニズム美術の地域性」『ギリシア・クラシックとヘレニズム』(世界美術大全集、第4巻)小学館、1995, pp. 297-302.
- 56) 「ヘレニズム絵画」『ギリシア・クラシックとヘレニズム』(世界美術大全集、第4巻)小学館、1995, pp. 303-312.
- 57) 「ギリシア伝統の東方伝播とローマ美術への継承 —ギリシア美術とローマ美術」『ギリシア・クラシックとヘレニズム』(世界美術大全集、第4巻)小学館、1995, pp. 321-331.

- 58) 「フェニキア美術と古代イベリア美術」『地中海世界とローマ』（世界美術大全集、第5巻）小学館、1997, pp. 57-68.
- 59) 「ローマ共和政時代の美術」『地中海世界とローマ』（世界美術大全集、第5巻）小学館、1997, pp.193-207.
- 60) 「共和政末期から帝政の確立へ」『地中海世界とローマ』（世界美術大全集、第5巻）小学館、1997, pp. 241-264.
- 61) 「フラウィウス朝と五賢帝時代」『地中海世界とローマ』（世界美術大全集、第5巻）小学館、1997, pp. 305-328.
- 62) 「セウェルス朝からコンスタンティヌス大帝の時代」『地中海世界とローマ』（世界美術大全集、第5巻）小学館、1997, pp. 329-344.
- 63) “I mosaici pavimentali della villa romana di Cazzanello,” *Atti del AISCOM*, 1997, pp. 815-828.
- 64) 「カッツァネッロのローマ時代別荘遺構の年代について」、『考古学の学際的研究 –濱田青陵賞受賞者記念論文集 I』昭和堂、2001年、63-84頁.
- 65) “A quoi tient le charme des haniwa,” *Haniwa*, Paris, 2001, pp.60-63
- 66) 「日本海と地中海」『日本開学の世紀（2）環流する文化と美』角川書店、2002年、7-16頁.
- 67) （共著）“La casa di Giulio Polibio –Note tecniche e metodologiche alla realizzazione di un modello virtuale,” *VR-Lav*. N. 5, 2002, pp. 17-25.

3. その他：学会講演、学会・研究会報告、フィールドワーク

A. 学会講演、学会・研究会報告

- 1976年 11月 “Casa della Nave Europa,” *Congresso Internazionale sugli studi pompeiani*, Pompei, Italia
- 1979年 11月 “Ripresa degli scavi nella villa romana di Realmonte” *Convegno Internazionale di Kokalos*, Palermo, Italia
- 1981年 10月 “Mosaici e opus sectile della villa romana di Realmonte” *Congresso Internazionale “Sicilia archeologica”*, Agrigento, Italia
- 1983年 11月 “Agrigento romano” *Convegno Internazionale di Kokalos*, Palermo, Italia
- 1985年 10月 “House and Villa in Aciunt Italy” *Ancient Italy*, University of Niemenhen, Netherland
- 1989年 11月 “Greek Art and Roman Art” *Ancient Art; Greece, Etruria and Rome*, National Museum of Leiden, Netherland
- 1993年 10月 “Stone and Wood” *International Congress “Conservation of Culture”*, Istanbul, Turkey
- 1996年 11月 “I mosaici pavimentali della villa romana di Cazzanello” *Convegno Internazionale di AISCOM*, Universita’ di Venezia, Italia
- 1998年 12月 “What is the Digital Alexandria” *International Symposium “Digital Alexandria”*, Tokyo
- 1999年 9月 “Dialogue or Polilogue?” *Dialogue among Civilizations*, United Nations, New York

- 1999年 9月 “Infrastructure of Culture Diversity,” *Culture Diversity*, UNESCO, Paris
- 2001年 3月 *The 7th Global Youth Exchange* 基調講演、国連大学
- 2001年 11月 “Mosaici e sectilia pavimenta della villa romana a Cazzanello,” *AIEMA*, Roma
- 2002年 4月 “How to document the Sicilian Culture?” *Documentation of World Heritage*, UNESCO, Paris
- 2002年 8月 International Symposium: *Dialogue among Civilizations*, 国連大学
- 2002年 11月 “Villa Romana di Somma Vesuviana,” *Convegno Internazionale “Nuove ricerche nell’area Vesuviana”*, British School at Rome, Italia

B. フィールドワーク

- 1) 1971年 9-12月 第2次熊本大学環地中海建築調査（研究分担者、調査国：トルコ、シリア、レバノン、ヨルダン）
- 2) 1973年 7-11月 第1次東京大学文学部文化交流研究施設ポンペイ遺跡発掘調査（研究代表者、調査地：エウローパの舟の家）
- 3) 1974年 7-10月 第2次東京大学文学部文化交流研究施設ポンペイ遺跡発掘調査（研究代表者、調査地：エウローパの舟の家）
- 4) 1975年 7-10月 第3次東京大学文学部文化交流研究施設ポンペイ遺跡発掘調査（研究代表者、調査地：エウローパの舟の家）
- 5) 1980年 7-10月 第1次シチリアの古代ローマ美術・考古学調査（研究代表者、調査地：アグリジェント近郊リアルモンテ村のローマ帝政期の別荘遺跡）
- 6) 1981年 7-10月 第2次シチリアの古代ローマ美術・考古学調査（研究代表者、調査地：アグリジェント近郊リアルモンテ村のローマ帝政期の別荘遺跡）
- 7) 1982年 7-10月 第3次シチリアの古代ローマ美術・考古学調査（研究代表者、調査地：アグリジェント近郊リアルモンテ村のローマ帝政期の別荘遺跡）
- 8) 1983年 7-9月 第4次シチリアの古代ローマ美術・考古学調査（研究代表者、調査地：アグリジェント近郊リアルモンテ村のローマ帝政期の別荘遺跡）
- 9) 1984年 7-10月 第5次シチリアの古代ローマ美術・考古学調査（研究代表者、調査地：アグリジェント近郊リアルモンテ村のローマ帝政期の別荘遺跡）
- 10) 1985年 7-10月 第6次シチリアの古代ローマ美術・考古学調査（研究代表者、調査地：アグリジェント近郊リアルモンテ村のローマ帝政期の別荘遺跡）
- 11) 1986年 7-10月 第7次シチリアの古代ローマ美術・考古学調査（研究代表者、調査地：アグリジェント近郊リアルモンテ村のローマ帝政期の別荘遺跡）
- 12) 1985年 8-9月 タルキニア近郊のローマ帝政期の別荘発掘予備調査（研究代表者、調査地：タルキニア近郊カツァネッロの別荘遺跡）
- 13) 1992年 7-10月 第1次タルキニア近郊のローマ帝政期の別荘発掘調査（研究代表者、調査地：タルキニア近郊カツァネッロの別荘遺跡）
- 14) 1993年 7-10月 第2次タルキニア近郊のローマ帝政期の別荘発掘調査（研究代表者、調査地：タルキニア近郊カツァネッロの別荘遺跡）
- 15) 1994年 7-10月 第3次タルキニア近郊のローマ帝政期の別荘発掘調査（研究代表者、調査地：タルキニア近郊カツァネッロの別荘遺跡）

- 16) 1995年7-10月 第4次タルクィニア近郊のローマ帝政期の別荘発掘調査（研究代表者、調査地：タルクィニア近郊カッツァネッロの別荘遺跡）
- 17) 1996年7-10月 第5次タルクィニア近郊のローマ帝政期の別荘発掘調査（研究代表者、調査地：タルクィニア近郊カッツァネッロの別荘遺跡）
- 18) 1997年7-10月 第6次タルクィニア近郊のローマ帝政期の別荘発掘調査（研究代表者、調査地：タルクィニア近郊カッツァネッロの別荘遺跡）
- 19) 1998年7-10月 第7次タルクィニア近郊のローマ帝政期の別荘発掘調査（研究代表者、調査地：タルクィニア近郊カッツァネッロの別荘遺跡）
- 20) 1999年7-10月 第8次タルクィニア近郊のローマ帝政期の別荘発掘調査（研究代表者、調査地：タルクィニア近郊カッツァネッロの別荘遺跡）
- 21) 2000年7-10月 第9次タルクィニア近郊のローマ帝政期の別荘発掘調査（研究代表者、調査地：タルクィニア近郊カッツァネッロの別荘遺跡）
- 22) 2001年6-10月 第10次タルクィニア近郊のローマ帝政期の別荘発掘調査（研究代表者、調査地：タルクィニア近郊カッツァネッロの別荘遺跡）
- 23) 2002年6-10月 第11次タルクィニア近郊のローマ帝政期の別荘発掘調査（研究代表者、調査地：タルクィニア近郊カッツァネッロの別荘遺跡）
- 24) 2002年9-10月 ナポリ近郊ソンマ・ヴェスヴィアーナの別荘遺跡発掘調査—通称「アウグストゥスの別荘」（研究代表者、調査地：ソンマ・ヴェスヴィアーナの別荘遺跡）

3.2 高山 博

1. 概要

- 1) 国家の比較研究
古代から現代に至る諸国家の形態、組織、統治システムの比較を行う
- 2) 西洋中世における統治システムの比較研究
西洋中世の主要な君主国（イタリア、フランス、イギリス、ドイツ、スペインなど）の統治システムを比較・検討し、その異同を明らかにする。
- 3) 中世地中海三大文化圏の比較研究
異なる文化・宗教を背景に持つ様々な人間集団が、地中海を舞台にどのように接触・対応していったかを通時的に見通すとともに、地中海の回りに形成された三大文化圏（ラテン・キリスト教文化圏、ギリシャ・ビザンツ文化圏、アラブ・イスラム文化圏）研究の接合を目指す。
- 4) 異文化交流研究／異文化接触論
異文化交流、異文化接触によって生じる様々な現象を分析し、人間集団が持つ特性と多様性を考える。
- 5) ノルマン・シチリア王国研究
ラテン・キリスト教文化、ギリシャ・ビザンツ文化、アラブ・イスラム文化が共存する十二世紀ノルマン・シチリア王国の解明を目指す。

2. 主要業績

A. 著書（単著）

- 1) *Exploring A Medieval Kingdom of Mystery: The Norman Kingdom of Sicily and Its Administration*, 2 vols., Yale University Ph.D. dissertation, New Haven, Conn. 1990 May, xxii + 401 pp. (University Microfilms Inc., Ann Arbor, Michigan)
- 2) 『中世地中海世界とシチリア王国』、東京大学出版会、1993年2月、560頁（No.1の改訂日本語版、トヨタ財団成果発表助成による）
- 3) *The Administration of the Norman Kingdom of Sicily*, Leiden/ New York/ Köln, E. J. Brill, 1993 July, xxi + 281 pp., hardcover & paperback (Series: The Medieval Mediterranean 3) (No.1の改訂英語版)
- 4) 『神秘の中世王国—ヨーロッパ、ビザンツ、イスラム文化の十字路』、東京大学出版会、1995年9月、360頁
- 5) 『ハード・アカデミズムの時代』講談社、1998年6月25日、230頁
- 6) 『中世シチリア王国』講談社、1999年9月20日、204頁
- 7) 『歴史学：未来へのまなざし』山川出版社、2002年7月20日、189頁

B. 編著・共著・共訳

- 1) 『「史学概論」カリキュラムの調査研究』、共著、放送教育開発センター、1994年、94頁
- 2) 『地域のイメージ』辛島昇との共編、山川出版社、1997年10月、422頁
- 3) 『西洋中世史研究入門』佐藤彰一、池上俊一との共編、名古屋大学出版会、2000年4月、360頁
- 4) 『地域の成り立ち』辛島昇との共編、山川出版社、2000年6月、368頁
- 5) ジャネット・L・アブー＝ルゴド著『ヨーロッパ覇権以前 もう一つの世界システム』上・下巻、佐藤次高、斯波義信、三浦徹との共訳、岩波書店、2001年11月、上巻288頁、下巻291頁
- 6) 『宮廷と広場』池上俊一との共編、刀水書房、2002年9月、344頁

C. 論文・研究ノート

- 1) 「十二世紀シチリアにおけるノルマンの財務行政機構」『史学雑誌』、第92編7号（1983年7月）、1-46頁
- 2) 「十二世紀ノルマン・シチリア王国の行政官僚」『史学雑誌』、第93編12号（1984年12月）、1-46頁
- 3) “The Financial and Administrative Organization of the Norman Kingdom of Sicily,” *Viator: Medieval and Renaissance Studies*, Berkeley/ Los Angeles/ London, vol. XVI (1985), pp. 129-157 (revised edition of No. 1 in English)
- 4) “*Familiares Regis* and the Royal Inner Council in Twelfth-Century Sicily,” *English Historical Review*, London, vol. CIV (1989), pp. 357-372
- 5) “The Great Administrative Officials of the Norman Kingdom of Sicily,” *Papers of the British School at Rome*, London, vol. LVIII (1990), pp. 317-335 (revised edition of No. 2 in English)

- 6) 「ノルマン・シチリア王国と歴史研究—ドゥアーナの研究をめぐって」『歴史と地理』、第 435 号 (1991 年 11 月)、1-16 頁
- 7) “The Aghlabid Governors in Sicily: 827-909, -Islamic Sicily I-,” *Annals of the Japan Association for Middle East Studies*, Tokyo, vol.VII (1992), pp. 427-443
- 8) “The Fatimid and Kalbite Governors in Sicily: 909-1044, -Islamic Sicily II-,” *Mediterranean World*, Tokyo, vol. XIII (1992), pp. 21-30
- 9) 「フィリップ四世 (1285-1314) 治世下のフランスの統治構造—バイイとセネシャル」『史学雑誌』、第 101 編第 11 号 (1992 年 11 月)、1-38 頁
- 10) “The Local Administrative System of France under Philip IV (1285-1314) -- *Baillis* and *Senechals*,” *Journal of Medieval History*, Oxford, vol. XXI (1995), pp. 167-193 (revised edition of No. 9 in English)
- 11) 「ノルマン・シチリア王国のアミーラトゥス—ノルマン行政の頂点に立つアラブ官職」『西洋中世像の革新』(樺山紘一編)、刀水書房、1995 年、31-50 頁
- 12) 「シチリア王国」『講座世界史第 1 巻：世界史とは何か—多元的世界の接触の転機』(歴史学研究会編)、東京大学出版会、1995 年、159-171 頁
- 13) 「ゲルマン人諸国家の成立」『ヨーロッパの歴史 = 基層と革新 =』(樺山紘一編) 放送大学教育振興会 1996 年、22-33 頁；改訂版「ゲルマン人諸国家の形成」『ヨーロッパの歴史』(樺山紘一編) 放送大学教育振興会 2001 年 3 月、25-36 頁
- 14) 「国家と王権」『ヨーロッパの歴史 = 基層と革新 =』(樺山紘一編) 放送大学教育振興会 1996 年、53-66 頁；改訂版「国家と王権の成長」『ヨーロッパの歴史』(樺山紘一編) 放送大学教育振興会 2001 年 3 月、59-72 頁
- 15) 「中世の地中海世界」『ヨーロッパの歴史 = 基層と革新 =』(樺山紘一編) 放送大学教育振興会 1996 年、67-76 頁；改訂版「中世の地中海世界とヨーロッパ」『ヨーロッパの歴史』(樺山紘一編) 放送大学教育振興会 2001 年 3 月、73-82 頁
- 16) 「フランス中世における地域と国家—国家的枠組みの変遷—」『地域の世界史 2：地域のイメージ』(辛島昇・高山博編)、山川出版社、1997 年 10 月、293-325 頁
- 17) 「中世ヨーロッパと現代」『歴史の対位法』(本村、山内、義江編) 東京大学出版会、1998 年 4 月、157-174 頁
- 18) “*Amiratus* in the Norman Kingdom of Sicily --A Leading Office of Arabic Origin in the Royal Administration,” *Forschungen zur Reichs-, Papst- und Landesgeschichte*, herausgegeben von K. Borchardt & E. Bunz, Stuttgart, Anton Hiersemann, Feb. 1998, pp. 133-144 (revised edition of No. 11 in English)
- 19) 「地中海のノルマン人」『岩波講座世界歴史第 7 巻：ヨーロッパの誕生』、岩波書店、1998 年 4 月、131-156 頁
- 20) “The Administrative Organization of the Norman Kingdom of Sicily,” *Mezzogiorno - Federico II - Mezzogiorno: Atti dei Convegni di Federico II*, Roma, Editore De Luca, 1999, pp. 61-78.
- 21) 「中世シチリアのノルマン王と官僚、貴族たち」『学問への旅 ヨーロッパ中世』(木村尚三郎編)、山川出版社、2000 年 4 月、59-77 頁
- 22) 「ノルマン・シチリア王国の行政機構再考」『西洋史研究』新輯第 29 号 (2000 年)、85-103 頁 (No. 20 の改訂日本語版)

- 23) 「中世南イタリアの多言語資料」『地中海世界の歴史像』（伊藤貞夫・樺山紘一編）放送大学教育振興会 2002 年 3 月、112-125 頁
- 24) 「中世地中海三大文化圏論」『地中海世界の歴史像』（伊藤貞夫・樺山紘一編）放送大学教育振興会 2002 年 3 月、126-138 頁
- 25) 「中世地中海の交易と人的交流」『地中海世界の歴史像』（伊藤貞夫・樺山紘一編）放送大学教育振興会 2002 年 3 月、139-154 頁
- 26) 「宮廷と広場ー出会いと創造のトポスー」（池上俊一との共著）『宮廷と広場』（高山博・池上俊一編）刀水書房、2002、3-21 頁
- 27) 「中世シチリアの宮廷と王権」『宮廷と広場』（高山博・池上俊一編）刀水書房、2002、25-45 頁

D. 学界動向・書評など

- 1) 日本イスラム協会・嶋田襄平・板垣雄三・佐藤次高監修『イスラム事典』、『史学雑誌』91 編 8 号（1982 年）1339 頁。
- 2) S・ランシマン著／護雅夫訳『コンスタンティノーブル陥落す』、『史学雑誌』92 編 11 号（1983 年）1815 頁。
- 3) “G. Loud, *Church and Society of the Principality of Capua*,” *Speculum: A Journal of Medieval Studies*, Cambridge, Mass., vol. LXII (1987), pp. 704-706
- 4) 「十二世紀ノルマン・シチリア王国研究」『創文』、第 308 号（1990 年 3 月）、15-18 頁
- 5) 清水廣一郎著『中世イタリアの都市と商人』、『社会経済史学』、第 56 巻第 5 号（1990 年 12 月）、109-111 頁
- 6) 「回顧と展望ーヨーロッパ中世西欧」『史学雑誌』、第 103 編 5 号（1994 年 5 月）、310-317 頁
- 7) J・ブムケ著『中世の騎士文化』、『史学雑誌』104 編 11 号（1995 年）、127-128 頁
- 8) A・グレーヴィチ著『同時代人の見た中世ヨーロッパ：十三世紀の例話』、『史学雑誌』105 編 7 号（1996 年）、127-128 頁
- 9) 「中世南イタリアに関する歴史学の成果 20 年 (1977-97)」『地中海学 20 年の成果』（地中海学会編）、1997 年 9 月、17-20 頁
- 10) G・クアトリーリオ著『シチリアの千年』、『史学雑誌』107 編 3 号（1998 年）、111-112 頁
- 11) 佐々木力著『学問論』、『思想』1998 年 5 月号、116-119 頁
- 12) L・バード著『ナバラ王国の歴史』、『史学雑誌』107 編 6 号（1998 年）、118-119 頁
- 13) E・マール著『ロマネスクの図像学』、『史学雑誌』107 編 6 号（1998 年）、120-121 頁
- 14) 「ノルマン・シチリア王国の研究」『中東研究』455 号（1999 年 10 月）、34-36 頁
- 15) S・ストレンジ著『国家の退場』、『史学雑誌』109 編 1 号（2000 年）、135 頁
- 16) 「中世国家論：帝国と王国」『西洋中世史研究入門』（佐藤彰一／池上俊一／高山博編）名古屋大学出版会、2000 年 4 月、43-49 頁
- 17) 「中世国家論：制度と統治組織」『西洋中世史研究入門』（佐藤彰一／池上俊一／高山博

編) 名古屋大学出版会、2000年4月、50-54頁

- 18) 「南イタリア」『西洋中世史研究入門』(佐藤彰一／池上俊一／高山博編) 名古屋大学出版会、2000年4月、240-244頁
- 19) P. Horden & N. Purcell, *The Corrupting Sea: A Study of Mediterranean History*, 『學鏡』2001年5月号、50-51頁

3. その他：学会講演、学会・研究会報告

- 1) 「神秘の中世王国－ノルマン・シチリア王国とその行政機構－」第14回地中海学会大会(於上智大学、1990年6月2日～3日)、研究発表、1990年6月3日
- 2) 「バイイとセネシャル－フィリップ四世美男王(1285-1314) 治世下のフランスの統治構造－」第89回史学会大会(於東京大学、1991年11月8日～9日) 西洋史部会、研究発表、1990年11月9日
- 3) 「バイイとセネシャルの歴史－フィリップ四世美男王(1285-1314) 治世下のフランスの統治構造の歴史的分析－」1991年度西洋史研究会大会(於青山大学、1991年11月15日～16日)、研究発表、1991年11月16日
- 4) “Local Administrative System of France under Philip IV (1285-1314) -*Baillis and Seneschals*-,” *Medieval Association of the Pacific, Annual Meeting* (於米国、シアトル、1994年3月4日～6日)、研究発表、1994年3月5日
- 5) 「ノルマン・シチリア王国の研究」東西海上交流史研究会(中近東文化センター)、研究報告、1994年10月1日
- 6) “L’organizzazione amministrativa nel Regno normanno,” *Mezzogiorno - Federico II - Mezzogiorno: Convegno internazionale di studio in occasione dell’VIII centenario della nascita di Federico II* (於イタリア、ポテンツァ／カステル・ラゴペソーレ／メルフィ、1994年10月18日～23日)、研究発表、1994年10月18日、Guest Speaker
- 7) 「ノルマン・シチリア王国の研究」「イスラム圏における異文化接触のメカニズム－人間動態と情報に関する総合的研究」プロジェクト研究会、研究報告、1994年12月22日
- 8) “Historiography of the History of Institutions of Norman Sicily. Some New Assumptions,” *L’École des Hautes Études en Sciences Sociales* (フランス国立社会科学研究院)、研究報告、1996年3月22日
- 9) “*Amiratus* in the Norman Kingdom of Sicily --A Leading Office of Arabic Origin in the Royal Administration,” *Medieval Association of the Pacific, Annual Meeting* (於米国、ホノルル、1997年3月14日～16日)、研究発表、1997年3月16日
- 10) 「中世シチリア王国」地中海学会秋期連続講演会「地中海の聖堂にて－祈りと美の空間」、ブリヂストン美術館、1997年11月15日
- 11) “Re-organization of Geo-political Units and States in Europe: The Middle Ages and Now,” *The University of Western Australia* (西オーストラリア大学、ネッドランズ、オーストラリア)、講演、1997年12月4日、Guest Speaker
- 12) 「中世の心象風景：天国と地獄」地中海学会春期連続講演会「地中海：善悪の彼岸」、ブリヂストン美術館、1998年6月6日

- 13) 「中世シチリアの異文化交流」地中海学会春期連続講演会「地中海：異文化の出会い⑥」、ブリヂストン美術館、1999年5月22日
- 14) 「ゲルマンと地中海世界」地中海学会春期連続講演会「地中海世界の歴史：古代から中世へ③」、ブリヂストン美術館、2000年5月27日
- 15) 「ノルマンと地中海世界」地中海学会春期連続講演会「地中海世界の歴史：中世から現代へ①」、ブリヂストン美術館、2001年4月28日
- 16) 「中世シチリア研究と現代世界」北海道大学史学会、2001年9月28日
- 17) 「シチリア伯ロゲリウス一世（1071-1101）の統治システム：ノルマン支配に残るアラブ的、ビザンツ的要素」史学会第99回大会、研究発表、2001年11月11日
- 18) “La fondazione del sistema amministrativo normanno,” *Congresso Internazionale di Studi: Ruggero I, Gran Conte di Sicilia, 1101-2001*, Troina (Enna), Italia, 29 novembre-2 dicembre 2001, Guest Speaker, 2001年12月1日
- 19) “Central Power and Multi-Cultural Elements at the Norman Court of Sicily,” Università di Palermo, Palermo, Italia, March 20, 2002, Guest Speaker
- 20) “Roger I’s Conquest of Sicily and his Governing Policy,” Università di Palermo, Palermo, Italia, March 22, 2002, Guest Speaker
- 21) “The Norman Court of Sicily: A Crossroads of Greek, Arabic and Latin Cultures,” *Department of Education Resident in Medieval Studies Lecture*, American Academy in Rome, Roma, Italia, October 24, 2002, Guest Speaker
- 22) “The Norman Administration of Sicily and Southern Italy: Reconsideration of its Historiography and Perspective,” *Medieval Workshoptalks*, American Academy in Rome, Roma, Italia, 11 November - 11 December 2002, 2002年11月11日
- 23) “The Meeting of Cultures in Sicily,” *Religious Minorities in the Norman World*, Faculty of History, Cambridge University in conjunction with EU ‘Culture 2000’ Project on *The Culture, Settlement and Migration of the Jews in medieval Europe*, Cambridge, UK, 2002, November 28, Guest Speaker, 2002年11月28日

VII 学生教育

1. 大学院・学部における授業（過去5年間）

大学院・学部教育に関しては、青柳正規教授が基礎文化研究専攻（形象文化）美術史学、高山博助教授が欧米系文化研究専攻（欧米歴史地理文化）西洋史学という具合に、それぞれの専攻領域の教育を担当している。過去5年間における各教官の授業内容は、以下の通りである。

1.1 青柳正規

大学院・文化交流演習「古典古代美術史」

個々の美術品や考古資料がもつ様々な情報を読み取り、整理分類して description を行うとともに、関連する作品や資料との比較を行って当該作品の位置づけを行うことは、美術史および古典考古学の基礎作業であり、出発点である。この基礎を習得するため、W. Helbig, *Führer durch die öffentlichen Sammlungen klassischer Altertümer in Rom* に採録されている解説作品から一点を、演習参加の学生がそれぞれに選び、上記の作業と研究を発表し、全員でそれを検討する。

文学部・文化交流特殊講義「ギリシア・ローマ美術史」

ギリシア幾何学様式時代からローマ帝政期までの造形美術の変遷を様式、技法、図像に関して概説する。とくに造形美術の自立的変遷と、社会背景との関係に力点をおく。

大学院・文化資源特殊講義「文化経営論」

日本、アメリカ、イギリス、フランス、イタリアの文化政策の特質、およびユネスコなど国際機関の活動を概観し、それらを基本に戦略的文化経営のあり方を考察する。

大学院・文化資源演習「文化経営論」

文化経営において重要な役割を果たす文化企画およびその実現のための found raising を、演習参加者に提案させ、参加者全員でその特質、位置づけ、実現のフィージビィティー等を検討する。

1.2 高山博

大学院・西洋史学演習「西洋中世比較史研究」、「西洋中世史演習」

1993-99年度は、「西洋中世比較史研究1～6」として、概ね5世紀から13世紀までの西欧中世の主要な王国（君主国）の国制を一年に一つずつ検討した。その順序は以下の通りである。中世イタリア（1993年度）、中世フランス（1994年度）、中世イギリス（1995年度）、中世スペイン（1997年度）、中世ドイツ（1998年度）、中世教皇庁（1999年度）。ただし、1996年度は西洋中世研究法の演習を行った。

2000年度以後は、「西洋中世史演習」として、中世ラテン語史料の講読と参加者の研究報告を並行して行っている。中世ラテン語史料には、手書きのオリジナル羊皮紙文書(写真版)や校訂された年代記 (Romualdus Salernitanus, *Chronicon sive Annales*, ed. by C.A. Garufi, Città di Castello 1909-1935 [RIS2,VII/1] など) を用いている。

文学部・文化交流特殊講義／西洋史学特殊講義 「中世フランスの王権と諸侯」、「中世地中海世界」

学部向けの講義では、異文化接触・交流、中世地中海史、中世フランス史に関するテーマを扱ってきた。1997～2001年度にかけては、「中世フランスの王権と諸侯」という題目で、国王と諸侯たちを中心に展開する中世フランスの国家的枠組みの変遷を講義した。王権とともに様々な領邦(ノルマンディー公領、フランドル伯、ブルゴーニュ公領、アンジュー伯領、シャンパーニュ伯領など)の形成過程とそれぞれの制度の変容過程を概観し、王権による領邦の統合吸収、アンジュー伯による領邦の統合、フィリップ二世尊厳王と王領地の拡大、ルイ九世とポワトゥー伯アルフォンソ、フィリップ四世美男王の統治システムを、順次検討した。

2002年度は、「中世地中海世界」という題目で、中世地中海に関する以下のようなテーマを扱った。ゲルマン人と地中海、中世地中海世界とヨーロッパ、ノルマン人と地中海、中世南イタリアの多言語資料、中世地中海三大文化圏の比較、中世地中海の制海権と交易圏の推移、中世シチリアの権力構造。

文学部・文化交流演習 「西洋中世史演習」

西洋中世研究への導入を目的とするこの演習では、中世期の西洋社会を理解する上で重要だと思われるいくつかの大きなテーマを、現在の学界の動向を中心に据えて、検討している。2年で1サイクルとし、初年度は、五世紀から十一世紀までのテーマ、たとえば、ローマ帝国衰亡論、ゲルマン諸部族・諸国家研究、シャルルマーニュ研究、ビザンツ研究、ピレンヌ学説とイスラム研究、中世初期社会経済史研究、ヴァイキング・ノルマン研究、封建制概念、神の平和運動研究、教会改革・叙任権闘争研究、中世都市研究などを扱う。次年度に十二世紀から十五世紀にかけてのテーマ、たとえば、中世イギリス研究、中世フランス研究、中世ドイツ研究、中世スペイン・シチリア・十字軍研究、教皇・教会史・異端研究、商業・経済史研究、十二世紀ルネサンス論・中世文化研究などを扱っている。

教養学部・総合科目一般 「国際政治・経済・社会の変容とメディア、I、II」

1, 2年生向けのこの授業では、国内外のメディアから出される重要な情報の取得の仕方、分析の仕方を学んでいる。最初の授業で、受講者をヨーロッパ地域、アメリカ地域、アジア・アフリカ地域の三つのグループに分け、毎週各グループから一人ずつ、その担当する地域に関する重要な記事 (*New York Times*, *Wall Street Journal*, *Financial Times*, *Economist*, *Business Week* など、日本語以外の新聞・雑誌からのもの) の報告と分析を行う。また、それとは別に、毎週、欧米の新聞・雑誌記事を課題として与え、それに基づく討論を行う。

2. 論文審査

2.1 青柳正規

※修士論文審査（美術史）は、毎年 4～8 本

※卒業論文審査（美術史）は、毎年 8～12 本

1993 年度

論文博士（主査、美術史：西野嘉章「15 世紀プロヴァンス絵画研究－祭壇画の図像プログラムをめぐる一討論」）

1998 年度

課程博士（主査、美術史：今井桜子「ローマ時代における煉瓦類刻印の研究－エトルリア地方を中心に－」）

2000 年度

課程博士（主査、美術史：黒岩三恵「聖王ルイ伝の画家と十四世紀パリ写本彩飾の研究」）

2001 年度

論文博士（主査、美術史：谷一尚「古代ガラス史研究」）

2002 年度

課程博士（主査、美術史：芳賀京子「ロドス島の古代彫刻に関する研究」）

2.2 高山 博

※修士論文審査（西洋史）は、毎年 8～15 本

※卒業論文審査（西洋史）は、毎年 20～30 本

1997 年度

論文博士（主査、西洋史：池谷文夫「13・14 世紀ドイツの政治と政治思想」）

1998 年度

論文博士（審査委員、東洋史：清水和裕「アッパース朝解体期の国家と社会－奴隷軍人・土地税制・民衆運動－」）

1999 年度

論文博士（主査、西洋史：櫻井万里子「古代ギリシャ史研究」）

課程博士（主査、西洋史：安西（亀長）洋子「中世ジェノヴァ商人の「家」」）

2000 年度

2001 年度

課程博士（主査、西洋史：荒木洋育「リチャード 1 世・ジョン期イングランドの政治史的展開と領主層」）

2002 年度

論文博士（主査、西洋史：河原温「中世フランドルの都市と社会」）

論文博士（審査委員、西洋史：伊藤正「ギリシャ古代の土地事情」）

課程博士（審査委員、東洋史：高野太輔「アラブ系譜体系の構造と成立過程」）

VIII 施設・設備

1. 研究室

平成 14 年 12 月現在、教官現員 3 名に対して、以下の 3 室（105 m²）の配分を受けている。

法文 2 号館 4 階（2429 室）	36 m ²	青柳正規 教授研究室
農学部構内総合研究棟 3 階	23 m ²	高山 博 助教授研究室
農学部構内総合研究棟 3 階	46 m ²	事務室 兼 図書収蔵室 兼 松山 聡助手研究スペース
	*	* *

平成 6 (1994) 年度末の段階において、当部門は、法文 2 号館内に、

2216 室	26 m ²	事務室 兼 図書収蔵室 兼 助手研究スペース
2217 室	24 m ²	青柳正規 教授研究室
2429 室	36 m ²	高山 博 助教授研究室
2406 室	28 m ²	図書ならびに各種史料収蔵室

の 4 室（114 m²）の配分を受けていた。

平成 7 年 4 月に行われた当部門の農学部構内総合研究棟 3 階への移転に伴い、当該年度当初は、

法文 2 号館 2429 室	36 m ²	青柳教授研究室
法文 2 号館 2406 室	28 m ²	図書ならびに各種史料収蔵室
総合研究棟 3 階	23 m ²	高山助教授研究室
総合研究棟 3 階	23 m ²	事務室兼図書収蔵室兼松山助手研究スペース
総合研究棟 3 階	23 m ²	図書ならびに各種史料収蔵室

の 5 室（137 m²）が配分され、一時的にスペースは増大したが、その後同年 7 月には、文学部内での教官研究スペースの確保の必要から、法文 2 号館 2406 室が当部門の管理下から離れ、やむなく同室に収蔵されていた資料や器材の一部を法文 2 号館教官談話室の奥に所在する事務用の倉庫に仮置きした。さらに平成 14(2002) 年 7 月には、文化交流研究施設寄附部門『文化環境復元』の設立に伴って、総合研究棟 3 階の 1 室をそちらに移管し現在に至っている。

占有スペースの減少に伴い、現在図書ならびに各種資料の収納に困難をきたしている状態である。後述するように図書の移管などで事務倉庫に仮置きされたものの一部に関しては、その管理と運用の適正化の措置をとったが、現在も一部の器材に関しては、未整理の状態です事務用倉庫に仮置きされている。さらに今年度設立された文化交流研究施設『文化環境復元』の研究室にも、多くの研究資料をそのまま置いた状態であり、双方の研究活動に少なからず支障をきたすことが懸念される。

2. 所蔵資料

当部門は、その設立からの経緯でも明らかなように、専任教官の研究専門分野が多様であることから、異なる分野の図書を多数所蔵する。またそのほか数多くの海外でのフィールド調査・研究の結果蒐集された写真・図面その他の資料も多数所蔵している。

図書

研究室所蔵図書

・東アジア（日本を含む）・中央アジア・南アジア歴史・美術関係和書	約 1,800 冊
・東アジア（日本を含む）・中央アジア・南アジア歴史・美術関係洋書	約 600 冊
・ギリシャ・ローマ歴史・美術関係洋書	約 1,600 冊
・ヨーロッパ・西アジア中世歴史・美術関係洋書	約 600 冊

文学部図書室保管図書

- ・主に雑誌類

文学部 3 号館図書室保管図書

・日本の文学書、日本歴史史料などの和書（主に叢書・全集類）	約 1,300 冊
・西洋哲学、歴史関係の洋書（全集類）	約 100 冊

象形文化研究拠点保管図書

・ギリシャ・ローマ歴史・美術関係洋書	約 8,000 冊
--------------------	-----------

これらの他に、美術史研究室名で所蔵登録されているが、諸般の事情により本研究部門に配架されている古代ギリシア・ローマ関係図書が約 700 冊存在する。

なお、当部門に収蔵されていたインド哲学並びにチベット仏教関係の図書・教典などの資料の一部は、協議の結果、1998 年にインド哲学研究室に移管された。これらは主に山口瑞鳳教授が本研究部門の専任教官であった時代に蒐集されたものであり、世界的に見ても貴重なものが多く含まれていた。しかし、殊に判読と分類に専門知識を必要とするチベット仏教関係の図書等に関しては、その後の整理、配架作業が遅滞し、閲覧もままならない状態が続いたことがその理由である。移管された図書等の冊数は、和書 173 冊、洋書 649 冊である。

その他の資料

アジア関係資料

・敦煌関係図像資料カード (同索引)	約 2,500 枚
・国内仏教関係図像資料カード	約 800 枚
・絵巻物関係図像資料カード	約 200 枚
・正倉院収庫品索引カード	約 850 枚
・正倉院絵画資料索引カード	約 650 枚
・現存絵巻物図版索引カード	約 550 枚
・絵巻物文献索引カード	約 600 枚

ローマ時代別荘遺跡発掘調査関係資料

・ 35mm リバーサルフィルム	約 7,000 カット
・ 35mm 白黒フィルム	約 7,000 カット
・ ブローニサイズ白黒フィルム	約 1,000 カット
・ ブローニサイズリバーサルフィルム	約 1,000 カット
・ 遺構実測図面	約 1,000 枚
・ その他デジタル化された画像・図面・記述情報等	約 70 GB

象形文化研究拠点保管資料

・ 銀塩写真フィルム	約 2,4000 カット
・ デジタル画像	約 2,3000 カット
・ 上記画像に付帯する記述情報等	約 1,8000 件

音声資料

・ 文化交流懇談会収録カセットテープ	114 本
--------------------	-------

Ⅸ 文化交流研究施設・基礎理論部門の役割と評価

1. 学会などにおける役割

1.1 吉田精一

学会役員など

- 1) 日本近代文学会（理事・代表理事）
- 2) 日本比較文学会（理事）
- 3) 全国大学国語国文学会（理事）

1.2 秋山光和

学会役員など

- 1) 美術史学会（常任委員）
- 2) 日仏美術学会（会長）
- 3) 東方学会（理事）
- 4) フランス学士院（客員会員）
- 5) 英国学士院（客員会員）

1.3 山口瑞鳳

学会役員など

- 1) フランス国立 Centre Nationale de la Recherche Scientifique, attachede reché de recherches (1958～1962)
- 2) Member d'honneur de La Societé Asiatique(France)
フランス・アジア協会（名誉会員）

1.4 青柳正規

学会役員など

- 1) 地中海学会（常任委員）
- 2) 史学会（理事）

学術雑誌編集等

- 1) *AUTOMATA, Natura, Scienza e Tecnica nel mondo antico* 学術編集委員 (Prof. Henneberg – Univ. of Adeleid, Prof. Renn – Max Planck Institut, Prof. Galluzzi – Univ. di Firenze, Dott.ssa Ciarallo – Soprint. di Pompei とともに)

1.5 高山 博

学会役員など

- 1) 史学会（理事・監事・評議員）
- 2) 地中海学会（常任委員）

学術雑誌編集など

- 1) *Journal of Medieval History* (Oxford, U.K.)
Editorial Board (1996 ~), Guest-Editor 1995 (vol. 21-2)
- 2) 『地中海学研究』
編集幹事、1997 ~ 99；編集委員、1999 ~ ；編集委員長、2000 ~
- 3) *International Medieval Bibliography* (Leeds, United Kingdom)
Regular Contributor for Japan, 1995 ~
- 4) E. J. Brill (Leiden, Netherlands)
Advisory Panel, 1997 ~
- 5) *Mediterranean World* (Tokyo, Japan)
Editor, 1992 (vol. 13)
- 6) 『史学雑誌』
編集委員、1994 ~ 95
- 7) 『地中海学会月報』
編集委員、1994 ~ 97

2. 高等教育・大学運営・社会における役割

2.1 吉田精一

- ・ 文部省国語審議会委員（1956～1958）
- ・ 日本ユネスコ国内委員会調査委員（文部省）（1956）
- ・ 東京教育大学評議員（1956～1962）
- ・ 日本近代文学館常務理事
- ・ 文部省大学設置審議会専門委員（1965～1971）
- ・ 歴史的風土審議会委員（総理府）
- ・ 学術審議会（専門）委員（文部省）
- ・ 埼玉大学教養学部長
- ・ 放送大学設置準備委員（文部省）
- ・ 大妻女子大学図書館長
- ・ 大妻女子大学文学部長（1976～1980）
- ・ 大妻女子大学図書館長再任（1980～1984）
- ・ 日本学士院会員
- ・ 大妻女子大学名誉教授

2.2 秋山光和

- ・ 仏・英・蘭・伊4ヶ国を巡回した日本古美術展に政府派遣員（1959年まで）
- ・ 外務省派遣日本文化講師（1965）
- ・ フランス、コレージュ・ド・フランス特別講師（1973）
- ・ 日仏会館常務理事
- ・ 日仏会館副理事長

2.4 青柳正規

学内

- ・ 総長補佐（1989～1990）
- ・ 広報委員会委員長（1992～1994）
- ・ 総合研究資料館館長（1993～1996）
- ・ 評議員（1994～1996）
- ・ 人文社会系研究科委員長・文学部長（1996～1997）
- ・ 副学長（1997～1999）

学外

- ・ 大学設置審議会委員（1997～1999）
- ・ ユネスコ国内委員会委員（1998～）
- ・ ユネスコ国内委員会文化活動小委員会委員長（2000～）

2.5 高山 博

学内

- ・将来構想委員会委員 (1995 ～ 1996)
- ・文化交流研究施設・基礎部門主任 (1996 ～)
- ・第一委員会 (1996 ～)
- ・文化交流研究施設運営委員会委員 (1996 ～)
- ・フィレンツェ研究・教育拠点設置準備ワーキンググループ (1997 ～ 1999)
- ・フィレンツェ研究・教育拠点運営委員会委員 (1999 ～ 2001)
- ・文化資源学ワーキンググループ (1997 ～ 1999)
- ・国立大学文学部長会議編『人を知る、世界を知る－文学部とは何か』制作 (1997)
- ・東京大学大学院人文社会系研究科編『文化資源学の構想』制作指揮 (1998)
- ・企画委員 (1999 ～ 2000、2002)
- ・全学公報委員 (1999 ～ 2000)
- ・公報ワーキンググループ (1999 ～ 2000)
- ・当面問題研究会 (1999 ～ 2000)
- ・博士論文複写・製本・販売委託プロジェクト責任者 (1999 ～ 2001)
- ・文学部所蔵作品複製プロジェクト責任者 (1999 ～ 2000)
- ・文学部所蔵作品複製プロジェクト 2 責任者 (2000)
- ・点検評価委員 (2001 - 2002)
- ・図書委員 (2001 - 2002)

学外

- ・21 世紀 COE プログラム専門委員 (人文科学) (2002 ～)

3. 世界・日本における評価

3.1 吉田精一

受賞

- 1) 毎日出版文化賞、1953年
- 2) 芸術選奨（文部大臣賞）、1955年
- 3) 日本芸術院賞、1959年
- 4) 勲二等瑞宝章、1979年

3.2 秋山光和

受賞

- 1) フランス政府芸術文化勲章（シュヴァリエ）、1959年
- 2) フランス政府オフィシエ章、1960年
- 3) 日本学士院賞、1967年
- 4) 紺綬褒章、1977年
- 5) 勲三等旭日中綬章、1991年
- 6) ベルギー政府レオポルド三世勲章、1992年
- 7) フランス政府レジョン・ドヌール勲章、1998年
- 8) 芸術文化勲章、1998年

3.3 山口瑞鳳

受賞

- 1) 日本翻訳文化賞、1972年
- 2) 日本学士院賞、1984年
- 3) 東方学術賞、1985年
- 4) 毎日出版文化賞、1988年
- 5) 勲三等瑞宝章、1996年

3.4 青柳正規

受賞

- 1) 地中海学会賞、1978年
- 2) Premio Porto Empedocle（ポルト・エンペドクレ賞、イタリア）、1984年
- 3) マルコ・ポーロ賞、1991年
- 4) 浜田清陵賞、1991年
- 5) 毎日出版文化賞、1993年
- 6) Onorificenza di Ufficiale dell'Ordine al Merito della Repubblica Italiana（イタリア共和

国功績正騎士勲章)、2002年

3.5 高山博

受賞

- 1) Robert S. Lopez Memorial Prize (最優秀中世史博士論文賞)、1990年
- 2) サントリー学芸賞(思想・歴史部門)、1993年
- 3) 地中海学会賞、1994年
- 4) マルコ・ポーロ賞、1994年

まとめ

1. 役割と成果

文化交流研究施設・基礎理論部門は、教授1、助教授1、助手1というごく小規模の部門であり、着任した教官の数は1966年の創設以来現任を含めて5名（助手をのぞく）にすぎない。しかし、この小さな部門が、東京大学と日本および世界の学術研究に果たした役割は、はかりしれないほどに大きい。この部門は、学界のグローバル・スタンダードに照らしてきわめて優れた教官の質と実績により、その設置の目的（学際研究、文化交流研究の推進）を十分に遂行したばかりでなく、当資料に示されるように、わが国のみならず世界の学界に大きな足跡を残してきた。当部門が果たした主要な役割と成果は次のようにまとめられる。

1-1. 国際的に最高水準の研究成果を生み出し、世界の学問をリードしてきた。

※研究成果の国際的評価は、1) 受賞、2) 国際的な学術専門誌の編集委員への就任、3) 国際会議への招待（ゲスト・スピーカー）、4) 権威ある出版社からの専門書の刊行・権威ある学術専門誌への論文の掲載、5) 研究成果の引用・参照、などにより判断されると考えられるが、当部門については、1)～4)に関して、以下のように確認できる。なお、5)については、それぞれの研究成果について多くの引用・参照がなされているが、正確なデータがないためここには記さない。

1) 叙勲・受賞（歴代教官5名）

- ・叙勲・受賞総数は27（そのうち、学士院賞・芸術院賞3、国外の賞7）。
- ・その内訳は、以下のとおりである。

勲二等瑞宝章1、勲三等旭日中授章1、勲三等瑞宝章1、紺綬褒章1、芸術文化勲章1、フランス政府レジオン・ドヌール勲章1、ベルギー政府レオポルド三世勲章1、フランス政府芸術文化勲章（シュヴァリエ）1、フランス政府オフィシエ章1、Onorificenza di Ufficiale dell'Ordine al Merito della Repubblica Italiana（イタリア共和国功績正騎士勲章）1、Premio Porto Empedocle（ポルト・エンペドクレ賞、イタリア）1、Robert S. Lopez Memorial Prize（イエール大学最優秀中世史博士論文賞）1、日本学士院賞2、日本芸術院賞1、サントリー学芸賞1、地中海学会賞2、毎日出版文化賞3、芸術選奨（文部大臣賞）1、東方学術賞1、マルコ・ポーロ賞2、浜田清陵賞1、日本翻訳文化賞1

2) 国際的学術専門誌の編集委員（現任教官2名）

- ・ *Automata*, Italy
- ・ *Journal of Medieval History*, Oxford, U.K.

3) 国際会議・国際シンポジウムでの招待講演・招待報告（現任教官2名）

- ・ 6回

4) 外国語による専門書・論文の刊行（歴代教官5名）

- ・ 外国語著作（単著） 2
- ・ 外国語編著・共編・共著など 13
- ・ 外国語論文など（吉田をのぞく4名） 約40

1-2. 当施設の研究目的である学際研究、文化交流研究を積極的に推進してきた。これは、以下の点に示されている。

1) 著作（歴代教官 5 名）

- ・著書 約 60（外国語 2）
- ・編・共編・共著など 約 110（外国語 13）
- ・論文など（吉田をのぞく 4 名） 約 270（外国語約 40）

2) 国際シンポジウム等の開催（現任教官 2 名）

- ・国際シンポジウムの開催 4 回
- ・研究集会・講演会の開催 36 回
- ・国際会議・国際シンポジウムの司会など 8 回

3) 文化交流研究懇談会の開催 168 回

4) 研究プロジェクト（現任教官 2 名・研究代表のみ） 22

- そのうち大規模研究プロジェクト 4

1-3. 東京大学における新たな学問分野・組織を生み出すインキュベーション・センターとしての役割を果たしてきた。

※文化交流研究施設は、1966～1993年の27年間にわたって、当部門（基礎理論部門）のみから成っていた。その間は、文化交流研究施設は基礎理論部門を意味していた。1990年代に入って、人文学の分野において緊急度の高い重要な研究を行う場を設ける必要が出てきたとき、文化交流研究施設がその場を提供することとなった。その際、それまでの研究組織の独立性を維持するために既存の組織を「基礎理論部門」とし、それを核に「朝鮮文化部門」「東洋諸民族言語文化部門」を増設するという形態を取った。このように、当部門（基礎理論部門）は新たな学問分野・組織を生み出すインキュベーション・センターとしての役割も果たしてきたのである。

1) 1993年に、文化交流研究施設内に「朝鮮文化部門」（時限10年）を増設。

この「朝鮮文化部門」は、2002年に大学院独立専攻「韓国朝鮮文化専攻」に改組され、施設を離れた。

2) 1994年に、同じく「東洋諸民族言語文化部門」（時限10年）を増設。

この「東洋諸民族言語文化部門」は、消滅の危機に瀕している少数民族の言語について調査・研究を行うという、きわめて緊急性の高い課題を遂行すべく設置された。この部門は、「言語動態学大講座」として教育研究組織に転換する予定である。

3) 2002年に、さらに、「文化環境復元部門」（寄付講座）を増設。

2. 展望

人文学分野において国際的に最高水準の研究成果を生み出し、世界の学問をリードしてきた当部門がわが国の最重要学術拠点の一つであることは間違いない。日本社会のグローバル化とともに高等教育、学術活動も世界のなかで評価されるようになってきており、このような学術拠点の重要性は今後さらに高まっていくことだろう。その水準を維持するために、当部門が設立当初から部内公募制を採用し、競争原理を維持し続けたことは特記しておかねばならない。

現在、世界のグローバル化の進展とともに、異文化の接触・交流（摩擦・衝突も含む）が恒常化しつつあり、異文化共存のための処方箋が強く求められるようになってきている。当部門が行ってきた異文化交流研究は、まさにそのような現代世界の要請に時代を先取りして応えてきたものであり、今後ますます緊急度を増していくと予想される。当部門に代表される異文化交流の研究拠点が、今後さらに重要性を増すことは疑いないだろう。

なお、人文社会系研究科・文学部は、同部門のこれまでの実績に基づき、また、現在推進中である「中核的研究拠点（COE）形成プログラム」で蓄積した学術資料と成果をさらに活用するために、当部門を核に文化交流研究施設を「次世代人文学開発センター」に改組し、人文学のさらなる飛躍的な発展をめざす計画を進めている。

